戦後東ドイツ農村の機械トラクターステーション
—— 農業機械化と農村カードル形成 ——

足立　芳宏

ADACHI, Yoshihiro

The Machine and Tractor Station of East Germany in 1952-1960. Agricultural Mechanization and the Making of New Rural Cadres

The role of the MTS (*Maschinen-Traktoren Stationen*), instituted in 1952 from MAS (*Maschinen-Ausleihen Station*), was not confined to giving the farm machinery service. It gained the political functions for advancing the rural socialism. The purpose of this paper is to explain their historical significance by analyzing 1)the formation of new rural cadres through the MTS, 2)the conflict between the MTS and farmers on the use of the maschinery, 3)the function of MTS-"instructors" for the collectivization. The site of our study is *Kreis Bad Doberan in Bezirk Rostock*. This county was divided into 4 MTS-districts: *MTS Jennewitz*, *MTS Radegast*, *MTS Rerik, and MTS Ravensberg*.

1) The MTS was a important apparatus for the formation of new rural communist cadres. We would focus upon three groups in the MTS; the political cadre, the agricultural technocrat, and the tractor driver. Firstly the conflict on political power within the MTS arose mainly between the MTS-director and the leader of political sections. Secondly we could find 2 paths of young agronomists for moving up the social ladder. Some became from agronomist assistants into influential "instructors". Others, mainly educated and provided by the new agricultural school system in GDR, became often the directors of new cooperatives founded in 1957 - 1961. They were different from other cadres in that they showed, even if partially, the independence as a technocrat. In contrast, few tractor drivers made a career path for the political cadre. They consisted of rural young men and showed the higher mobility than others, in which we could find the difference from industrial workers in the social behavior. However, they did not always identified themselves with the farmers, as was recognized in their consciousness against the shift drivers.

2) Analyzing the utilization of the MTS-machinery, we could find the difference in working process of seed cultivation, harvest and threshing, and digging the potato. While in cultivation both farmers and cooperatives did without MTS-tractors any more, we could find the village farmers taking the leadership to avail sheaf-binders harvester and thresh machines within the villages. It was most difficult to mobilize the machines and workers for potatoes and beets, which cause to damage especially cooperatives. Concerning potatoes, strong-new-farmers did not depend upon the MTS-machinery. They confined it to the grain.

The establishment of the MTS brigade satellite center covering the 3 - 4 villages was a measure to arrange the relation between the MTS and farmers. The dissolution of MTSs and the absorption of their machinery into large cooperative type III would finally solved these problems. We could not deny that it damaged individual farmers depending upon MTS-tractors. However, tractor drivers opposed against joining the cooperatives. While some drivers left their MTS, others could take the preferential treatment in the cooperatives, which means that the conflict between the MTS and farmers became included in the new large cooperatives.

3)"Instructors" of a political section, a remarkable characteristic of the MTS, had the task not

only to control the discipline of MTS-organ. They had a strong influence on the village politics to advance SED political power. It is worthy to notice that many “instructors” came from rural population, although firstly engaged as a employee in the MTS. Therefore we could not regard them as a strange activist. In addition, some influential “instructors” of the MTS political section employed about 1952/53 were engaged in the activities as “district instructors” in 1958-1960.These “district instructors” had played the critical role of the collectivization after the end of 1957. They made and implemented the well-laid agitation plan for collectivization, mobilizing many kinds of rural cadres from both inside and outside of village. We could regard it as the sophisticated violence, that was one reason why the forced collectivization of GDR didn't caused the physical violence.

1．はじめに

大型農業機械が疾走する巨大農場、あるいは最新設備が装備された巨大畜舎で飼育される家畜の群。いまでこそ日常化してしまい、それゆえにこそ有機農業やエコロジーを主張する立場からは批判されるに過ぎないこうした風景も、しかしおそらく1960年代頃までは農業に携わる世界の多くの人々が追求してやまない「夢」の中核部分をなしていたといってよい。とりわけ近代科学を神髄とし世界のあくなき「工業化」を志向する戦後社会主義世界のリーダーたちにとって、それは理想的農業の姿そのものでもあった。冷戦体制の最前線にたたされた戦後東ドイツ農業もまた同じである。たとえば当時のドイツ民主農民党―政権支持の農民政党―が発行する機関誌『農民のこだま』のトップには毎号写真が掲載されるが、そこには新型の大型農業機械とともに、若い女性のトラクター運転手や農業技師の写真が新時代農業を象徴するものとしてしばしば登場するのである(1)。

ところで戦後東ドイツにおいて農業の全面的集団化が完了するのは1960年4月のことであるが、それ以前の個人農が支配的な時代にあって農業の機械化と社会主義化を担ったものが機械トラクターステーション（以下、MTS（エム・テー・エス））であった。東ドイツの戦後土地改革では400ha程度の農場が解体・分割され新農民経営が創出されるが、旧グーツ経営の大型機械は分割されようもなく、当初は村落の農民互助協会の資産とされる。これを資源に、1948年から1949年にかけて個人農に対する機械提供サービスを行う国家組織として―ソ連のモデルを参照にしつつ―機械貸与ステーション（以下、MAS（エム・アー・エス））が設立されるのだが、早くも1952年7月の集団化宣言とともにMASはMTSに再編されることとなるのである。以後、資本装備の充実がはかられていくが、1959年、全面的集団化が進行するなかでMTSは大規模農業生産協同組合（以下、LPG）へと順次吸収されることが決定され、1960年代初頭には、集団化の完了とともに実質的にその歴史的使命を終えることとなった。個人農がトラクターなどの大型機械を個人的に新たに購入することは困難であったから、戦後東独における農業部門の大型機械導入はもっぱらMTSを通して実現していくことになる。それはドイ

ツ農業史上において大型機械化農業への「離陸」過程とみなしうるものであろう。

しかしMTSは単なる「機械銀行」にとどまるものではまったくない。MTSは農村における党組織の政治的拠点でもあったからである。MASにおいても「文化指導者Kulturleiter」が配置され、彼らを軸として、映画・演劇・スポーツなど、農村部においても政治的意味を付与されたさまざまな文化活動が行われた。しかし1952年のMTSへの再編時に文化指導者は廃止、新たに「政治課Politabteilung」が設置されMTSの政治的な役割は格段に強化されることになった。これによりMTSは農村部の政治的掌握とLPG強化の出撃拠点となるのである。のみならず、MTSは、農民文化を基調とする農村部のなかで、これとは異なる社会主義の政治文化を生きる農村カードルたちの日常空間であった。MTSを通してとりわけ若い世代を中心に戦後社会主義を担う農村カードルが排出されていくのである。こうして戦後東ドイツ農業の機械化は、新しい農村支配層であるカードル形成―具体的には党活動に専従する政治カードルと農業技師などの技術カードル―と結びつきつつ進展していったのである。農村社会主義の権力形成が農業機械化と結びつきつつ形成されていった点は、とりわけ戦前よりある程度の農業機械化水準を達成していた北部東エルベ型農業地域の戦後社会史をみるうえで注目すべき特徴といえよう。

このように1950年代の東ドイツ農業史を語るときMTSは重要な位置を占めると考えられるが、にもかかわらずMTSに関する本格的研究は現在に至るまでほとんどなされてこなかった。日本では管見の限りわずかに村田がザンダーの研究によりつつMTSの機械化水準について数ページの記述をしているのみである(2)。もちろん近年のドイツにおける戦後東ドイツ農業史の最新研究を繙けば、ある程度まとまった言及を見いだすことができる。たとえばバウアーケンパーは、その包括的著作においてMTSについての節をもうけて概説的な記述をしている(3)。しかし、彼の場合、社会主義統一党（以下、SED）権力と旧農民層の対抗を軸として全体が立論されていることもあって、MTSの評価はおしなべて低く、その政治的・経済的な機能不全が強調される傾向がある。これとは別にバウアーケンパーには農村カードルを扱った論功があるが、そこではMTSは農村カードル世界の一部として登場するにすぎない(4)。もちろん農村カードル世界はMTSに閉じられていたわけでは全くないので、農村カードルを論ずる場合には少なくも郡エリアを視野におさめた分析が必須であるが、しかし分析がもっぱら政治的領域に限定されてしまっており、農業機械化や農村集落との関係が論点化されていない点に不満が残る内容となっていると言わざるをえない(5)。

こうしたなか、1950年代農村における国家保安部（いわゆるシュタージ）活動の実態をはじめて明らかにしたものとして近年のテスケの研究が注目される。そこではSED農村政治支配の拠点としてのMTS政治課に焦点があてられ、政治課と国家保安部の密接な関わりが指摘される一方、主としてライプツィヒ県とドレスデン県を対象として秘密情報提供者の実態が分析されている。1953年「6月事件」がMTS政治課や農村諜報活動に与えた影響や、とくに1950年代においては諜報工作網は拡大したものの、その活動はなお実質的な効力を

もつに至らなかったことなど、興味深い事実がそこでは明らかにされている[6]。ただし分析の関心があくまで諜報工作活動の組織や制度に向けられるために、農村支配や農村カードルとの関わり、さらには農業機械化や集団化との関わりなどは残念ながら主題化されているとは言い難い。

さて、私自身は、この間、集団化を村落再編にかかわらせてミクロ史的に分析するという作業を行ってきた。とりわけ村の主体のありように焦点を定めつつ、その戦略の多様性を明らかにすることに力を注いできた。しかしながらそれだけでは戦後東ドイツ農村の社会主義権力形成を論じるには不十分である。第一に集団化過程は単に農村住民のみならず物的資源の再編過程でもあるが、大型機械の問題は畜舎の新設・改築と並んで集団化の帰趨を左右する重要点であったし、第二に、集団化過程においては村内有力者のカードル化のみならず、MTS 系譜の村外カードル層の入村という事態がみられたからである。村落支配の再編は村落内で完結するものでは毛頭あり得ず、上位権力を視野に入れながらあくまで重層的に理解する必要があるのである。1950 年代を通して MTS は大型機械と党カードルの出撃拠点でありつづけた。後述するように MTS は機械サービスの点で明らかに限界があり、その政治的支配も不安定で一元的に村内に浸透したわけではまったくないが、だからといってその意義を過小評価することもできないのではないか。とりわけ、もともとの大農業地帯であり、土地改革による新農民層が厚く存在する北部地域ではなおさらであろう。

以上のような点を考慮しつつ、本稿では、主として農村カードル形成や農村の政治的支配との関わりを意識しつつ、1950 年代における MTS の活動実態について郡エリアを単位として可能な限りミクロ史的に明らかにしたい。ここでミクロ史的な分析にこだわるのは、なにより MTS に生きた人々、すなわち SED 農村支配の末端を担った人々の実践主体のありようから問題を論じたいからに他ならない。より具体的には、第一に MAS 設立から MTS 再編の経緯をふまえたうえで、第二に MTS カードルの世界のありようを、党幹部の権力闘争や農業技師などのカードル化に着目して明らかにし、第三に MTS と各村落・LPG の関わり方を、機械と労働の編成のあり方とその変化、および MTS 政治課指導員の活動を軸に明らかにしたい。その上で、最後に全面的集団化における MTS 指導員の役割と MTS の LPG 吸収過程についてみていくこととしたい。

対象とするのは、私がこれまで分析してきたのと同じくロストク県バート・ドベラン郡である。この郡はそれぞれ性格が多少異なるイエーネヴィツ、レーリク、ラーヴェンスベルク、ラーデガストという 4 つの MTS 管区から構成されるが、ここでは新農民比率が高い MTS レーリクと、逆に旧農民が相対的に厚く存在する MTS イエーネヴィツの二つの MTS を軸に、残りの二つの MTS を加味する形で議論を進めていくこととしたい[7]。

史料としては主としてグライフスヴァルト州立文書館所蔵のバート・ドベラン郡 MTS 党関連文書を用いる。このうち特に依拠するのは各 MTS 党会議議事録および各 MTS 政治課指導員による郡党宛文書である。後述するように MTS 政治課は、MTS 経営党組織のみな

らず、MTS 管区農村の政治的組織化を任務とする党機関であるが、その重要任務の一つが在地の情報収集と郡党指導部への報告であった。彼らは週の半分ほど村に入り、残りの半分で MTS 経営の政治活動と報告書作成を行っていたのである。とくに MTS 全盛期であった 1953-1956 年頃の報告の密度は非常に高く、史料としてはきわめて有用である。ただし史料の残り方には MTS ごとに年代的にかなりのばらつきがみられる。上記の 2 つの MTS はこのうち情報量が比較的多い MTS である[8]。

2．MAS 設立から MTS 再編へ　―制度と組織の概略―

(1) MAS の設立　―農業団体の国家化の一環として―

先述のように、メクレンブルク州においては土地改革の結果、旧グーツの大型機械―代表的なものはトラクターと脱穀機―は農民互助協会の管理・利用にゆだねられた。しかしトラクターについては、ガソリン不足、部品不足、修理能力の不足により稼働率が低く、当初よりその利用において郡当局が介入する状況であった。このため早くも 1948 年 2 月に各郡当局主導のもと郡農民互助協会により各管区に機械センターが設立されることになった。これが MAS の母体となっていくのである[9]。本稿が対象とする MTS レーリク管区では、レーリク市にあった旧国防軍施設―レーリク市はナチ時代に軍港として発展した街である―の跡地に、農民互助協会の機械センターが設置されている。当初は従業員 12 名であり、資本装備もトラクター 7 台、キャタピラー型トラクター 1 台、運搬用トラクター 1 台のほかはわずかな農具類であり、いずれも各農場から集められたものであったという[10]。

このように当初の機械サービス事業は農民互助協会の機械センターとして出発するが、1948 年 11 月、党中央の要請を受けたドイツ経済委員会によって MAS 管理部が設立され、上記の機械センターがここに買収されることにより国有企業としての MAS が誕生していくことになる[11]。レーリク市の機械センターも 1949 年に MAS となったとされている[12]。MAS が国家の直接投資によってではなく農民互助協会所有のトラクターを買収する形でなされたのは、もともと土地改革に規定される形で機械センター設立の要請があったことや、国家の資本不足によるためでもあろうが、同時にトラクターなど大型機械の保有と利用を可能な限り国家が掌握するという政策的意図が強く働いたことは間違いないと思われる。

この点に関わって注目したいのは、MAS 設立がその他の一連の農業制度再編の一環として行われているということである。戦後東ドイツの農業の国家化といえばもっぱら 1952 年以降の集団化を想定しがちだが、実は 1948 年から 1950 年にかけて、あたかも東ドイツ建国に対応するかのように、個人農を前提とする農業制度の国家化ともいうべき事態が進展しているのである。具体的には、戦後東ドイツの農産物の国家調達を独占的に担う国営調達・買付機関の設立が 1949 年、農業資材取引を独占的に行うこととなる農民流通センターの設

立決定が 1949 年、さらに農村信用業務を独占することとなるドイツ農民銀行設立が 1950 年と、一連の重要機関設立が矢継ぎ早になされているのである[13]。

こうした農業関連団体の国家再編の焦点となったのがライファイゼン組合であった。よく知られるように、ライファイゼン組合はナチス期の強制的同質化過程で単一農業団体としての全国食糧職分団に吸収されるが、戦後の非ナチ化において全国食糧職分団が解体された結果ライファイゼン組合が復活、1947 年までにとりわけ肥料を中心とした購販事業をテコに急速に拡大し、農民組織として大きな影響力をもつようになったという[14]。上記の農業制度の国家再編―特に農民流通センター設立―は、この戦後復活したライファイゼン組合を事実上強制解体させる過程でもあったのである。農業機械サービスに関してはあくまで機械センターの MAS 化が基本線であるが、たとえばウゼドム郡においてライファイゼン組合の修理工場が郡農民互助協会に買収される形で機械センターが設置されていることなどから、必ずしも無関係とはいえないようである[15]。

もっとも設立時の MAS の機械装備実態となると、先の MTS レーリクの例にみたように貧弱であることは否めない。表 1 は MAS 設立間もない 1948 年中葉頃のメクレンブルク州の機械保有の内訳を郡別に示したものである。みられるように州全体の MAS のトラクター保有率は約 37% となっており決して高い水準とはいえない。さらに、脱穀機やジャガイモ収穫機の占有率となるとわずか 1 割にすぎず、MAS がもっぱらトラクター中心の組織であったことがわかる。ただし、その比重にはかなりの地域差がみられる。すなわち、ヴィスマール郡、ギュストロー郡、マルヒン郡など土地改革の中心地域であって新農民集落比率が高い郡ほど MAS のトラクター占有率は 5 割前後と高水準となるが―本稿が対象とするバート・ドベラン郡はこちらの部類に属する―、逆にルートヴィヒルスト郡やハーゲナウ郡など中小

表 1　メクレンブルク州における大型農業機械の保有形態別の内訳（単位：台数）

郡名	トラクター				脱穀機			ジャガイモ収穫機		
	総数	うち MAS	うち企業	MAS 占有率	総数	うち MAS	同占有率	総数	うち MAS	同占有率
州全体	4,100	1,539	229	37.5%	23,030	2,016	8.8%	20,751	1,758	8.5%
ヴィスマール郡	289	133	3	46.0%	934	168	18.0%	802	121	15.1%
ロストク郡	303	104		34.3%	1,587	129	8.1%	1,490	104	7.0%
(新農民が支配的な郡)										
ギュストロー	300	157	9	52.3%	1,082	176	16.3%	1,658	242	14.6%
マルヒン	188	110	14	58.5%	571	136	23.8%	1,133	156	13.8%
(旧中小農が支配的な郡)										
ルートヴィヒスルスト郡	108	15	16	13.9%	2,571	18	0.7%	1,128	13	1.2%
ハーゲナウ郡	300	42	44	14.0%	2,308	49	2.1%	1,579	46	2.9%

注　：1950年頃の数値と思われるが年代は不詳である。なお、バートドベラン郡は1952年の郡制再編で誕生したためここでは登場しない。このためここでは前身のヴィスマール郡とロストク郡の数値を掲載した。
出典：Landeshauptarchiv Schwerin, 6.21-4 (Landesverwaltung der MAS/VVMAS 1948-1952) Nr.149, oh Bl.

農地帯であって土地改革の影響の小さかった地域ではその比率は 14% と極端に低くなっている。ハーゲナウ郡では企業保有トラクターが 44 台と多いことも見逃せない点であろう。戦前以来の機械貸与業者がなお存続していた可能性をこの数値は示しているからである。設立の経緯から容易に推測されることとはいえ、ここにも MAS 形成が土地改革のありように深く規定されていたことがうかがえるのである。

MAS を担った人々については、1951 年の個人カードが一部の MAS に関して閲覧できる(16)。このカードには各 MAS 経営の指導的な位置にいた人々について、その氏名、職責、生年月日、社会出自のみならず、学歴、職業資格、単身か既婚かの区別、現住所、MAS 採用時期、採用時の前職から、旧軍位、抑留経験までが記載されいる。本稿の対象とする MAS についてはカードがなかったため、ここではギュストロー郡とハーゲナウ郡という二つの郡の MAS について一覧にしてみた。（大きな表となるので、紙幅の関係からここでは掲載を断念する）。これによれば、第一に MAS 指導部は、基本的に「所長 Leiter」、「農業技師 Agronom」、機械整備を担当する「技術指導者 Techn. Leiter」、取引や事務を担当する「経理部長」、そして政治活動を担当する「文化指導者」よりなっているが、年齢をみると 20 代から 30 代が中心となっており、青年時代を軍隊で過ごした若い世代によって担われていることがわかる。比較的年配の所長クラスですら 30 代半ばから 40 代半ばあたりに集中しており、政治活動を中心とする文化指導者となるとほとんど 20 代である。興味深いのは所長と農業技師のキャリアの違いであろうか。前者は機械工、旋盤工、鍛冶工など熟練労働者層出身で、学歴は義務教育までである。この点では所長は技術指導者と同じく労働者文化に生きる人々であったということができる。また所長の前職をみるとすでに MAS の文化指導者や所長であった者がかなり含まれることから、当初より MAS カードルの異動が頻繁に行われていたこと、また所長人事においては党派性が重要な要件であったろうことがわかる。これに対して農業技師はほとんどが「農民」もしくは「農業者」とされており、学歴も中卒やギムナジウム修了など相対的に高い。とくに興味深いのは小農的なハーゲナウ郡の MAS において、その職責が「農業技師 Agronom」ではなく「農民顧問官 Bauernberater」と記載されている人々が多数派であることである。この違いが何によるかは不明だが、彼らの実践的な農業知識を評価したうえでの採用であった可能性はかなり高いと思われる。このように農業技師に求められていたのはなによりも農業専門家ないし実践的農業経験者のとしての能力であったろう。そして初期の MAS を農業面で担ったのは、こうした戦前・戦時期に農業専門家として育成された人々であった。後述するように、この傾向はそのまま初期の MTS 時代にも継承されていくのである。

（2）MTS の資本装備と組織構造

1952 年 7 月、第 2 回党協議会による集団化宣言に呼応するかのように MAS は MTS へと再編される。また、このとき、ヴィスマール郡東部とロストク郡西部を統合する形で新た

にバート・ドベラン郡が誕生している。これに伴い本郡ではイエーネヴィツ、ラーデガスト、レーリク、ラーヴェンスベルクの4つのMTS管区がおかれることになった。ただし各MTS管区の区割りや本部所在地はMAS時代と同じであり、変更はなされていない。また、既述のようにMASからMTSへの移行のポイントとなるのは政治課の設置であったが、これにより文化指導者は廃止され、政治課のもとに複数の指導員が党専従活動家としておかれることとなった。政治課は郡党指導部に直結した組織であったから、その設置はMTS経営をより直接的に郡の政治的支配下のもとにおくことを意味したといえよう。

こうした新たな政治的・経済的な位置づけのもと、MTSの資本装備は急速に拡大していく。表2は本郡の4つのMAS/MTSについて1949年から1954/55年までのトラクターと脱穀機の台数の変化を示しているが、ここからはわずか6年間にトラクター台数が約3倍以上と急速に拡大していることがわかろう。その数は、規模の大きいMTS イエーネヴィツで71台、規模の小さいMTS レーリクでも40台になっている。他方で脱穀機の伸びは明らかに頭打ちであり、各管区の集落数にも遠く及ばない水準である。これは脱穀機がMTSによるのではなく主として集落内で調達されたことを意味する。MTS以外の保有を含む郡全体のトラクター総台数の推移は不明だが、上述のように1949年のMASのトラクター占有率が4割弱の水準であったことを考えると、台数がほぼ倍増したMTS移行時の1952年には域内のトラクターの大部分をMTSが占めることになったと考えてよいと思う。実際、民間保有のトラクターに関する記述は各種史料上でまったく見いだせないのである。車種の点でも、この間に、戦時期のランツ社製「ブルドック」から戦後東ドイツ製の「アクティヴィスト」や「ピオニール」への切り替えが進んだ[17]。1956年以降についての台数の推移は残念ながら不明だが、後述するようにトラクターに加えて新たにコンバインやジャガイモ一貫収穫機など新しい大型機械の導入が図られていくのが特徴である[18]。

表2　各MAS/MTSにおけるトラクターおよび脱穀機の保有台数の推移（単位：台数）

	MTS イエーネヴィツ		MTS レーリク		MTS ラーデガスト		MTS ラーヴェンスベルク		計	
	トラクター	脱穀機	トラクター	脱穀機	トラクター	脱穀機	トラクター	脱穀機	トラクター	脱穀機
1949　年	16	22	8	16	30	18	18	19	72	75
1950	21	21	20	16	41	18	26	19	108	74
1951	34	24	22	16	44	20	43	23	143	83
1952	51	22	30	16	48	22	53	26	182	86
1953	56	21	35	16	51	23	48	22	190	82
1954	66	24	39	18	59	24	51	22	215	88
1955	71		40		59		53		223	

出典：1955年はVpLA Greifswald, Rep.294, Nr.243, Bl.11より。その他はRep.294, Nr.233, S.5 -7より作成。

こうした資本装備の拡大はMTS組織の拡充過程でもあり、運転手を含む従業員数の急増につながっていく。表3は1954年のMTS レーリク、および同時期と思われるMTSラーヴェ

表3-（1）　MTS レーリクの経営組織と従事者の年齢構成（1954年）

		人数	うち女性	生年月日				SED 党員
				1920年以前	1920年代	1930年代	不明	
管理指導部門	政治課	5		3	1	1		5
	経営指導部	4		1	1	1	1	2
	事務部門	9	7	4		5		1
	農業技師	3		1	1	1		1
現業部門	修理部門（機械工）	20		10	6	2	1	12
	ブリガーデ長	6		2	3	1		1
	トラック運転手	3		3				2
	トラクター運転手	40		5	5	30		6
	補助労働者	6		3	1	1	1	1
補助部門	料理人	2	1		1	1		
	警備 Betriebsschutz	4		3	1			3
		102	8	35	20	43	3	34

注　：事務は、経理・賃金管理・倉庫管理などを集計した。トラクター運転手に同見習いが含まれるかどうかは不明。補助労働者には脱穀担当者を含めた。
出典：VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242,Bl.164-168 から作成。

表3-（2）　MTS ラーヴェンスベルクの経営組織と従事者の年齢構成（年代不詳）

		人数	うち女性	生年月日				SED 党員
				1920年以前	1920年代	1930年代	不明	
管理指導部門	政治課	2	1		1	1		2
	経営指導部	6		3	3			6
	事務部門	6	2	3	3			1
	農業技師	2			2			1
現業部門	修理部門（機械工）	13		5	4	4		4
	ブリガーデ長	7		3	4			3
	トラック運転手	5		2	3			
	トラクター運転手	51	4	5	10	32		2
	同、見習い	9				9		
	その他の補助労働者・見習い	5		1	1	3		1
補助部門	料理 / 掃除	2	2	2				1
	警備	4		3		1		1
	ガソリン	1	1		1			
		113	10	27	32	50	0	22

注　：経営指導部には、所長、副所長、技術指導者、経理部長の他に配置担当と労働組織担当を含めた。
出典：VpLA Greifswald, Rep.294.Nr.240, Bl.74-78 より作成。

ンスベルクの従業員構成を示すものである。いずれも従業員リストから作成したものである。従業員数は MTS レーリクで 102 人、MTS ラーヴェンスベルクで 113 人であり、1950 年代中葉時点でほぼ 100 人規模の国有企業に成長していたことがわかる[19]。MTS レーリクの場合、MAS 設立時の従事者数は 12 名であったから、約 9 倍の増加ぶりである[20]。MTS 経営

幹部としては、MAS 時代と同じく、所長、農業技師、技術指導部長、経理部長などがおかれ、これを政治的に監督する組織として政治課がおかれている。現業部門で中核となるのは、修理部門を担当する機械工たちと、なんといってもトラクター運転手であった。トラクター運転手は当初よりいくつかのブリガーデに編成され、各班の責任者としてブリガーデ長がおかれている。

これらとは別に MTS には強力な SED 党組織が存在する。MTS 経営党組織の中核は党指導部である。歴代の党指導部役員をみると、おおむね経営幹部層やブリガーデ長クラスからなっているが、その他の職階の有力党員も選出されている。MTS 党組織トップは党書記であるが、その政治的な影響力は人によってばらつきがみられ、必ずしも強い政治力をもつとは言い切れない。党指導部会議は重要な決定機関であるが、ここで発言力をもつのは主として MTS 所長や政治課指導者など郡党指導部との直接的なコネクションをもつであろう党派性の強い人物たちであった。なお MTS の SED 党員比率はおおむね 2 割～ 3 割といった水準であり、党組織を核に、労働組合、青年組織、「独ソ協会」などのフロント団体がおかれている。ちなみに MTS の女性職員は事務職と調理部門に集中しており、現業部門の女性は少ない。このため政治課女性指導員はもっぱら各村落の婦人組織活動に従事する傾向が見られる。

ところで、ここでとくに注目したいのは、修理部門の機械工たちとトラクター運転手の社会的属性がかなり異なっていることである。この表にみられるように、修理部門は圧倒的に工業労働者出自の人々で成り立っており、年齢も 1920 年代以前がもっとも多いなど高齢で、かつ党員数も、とくに MTS レーリクでは 12 人、比率にして 6 割と高水準に達している。また、本表のもととなった従業員リストには現住地が記載されているが、それをみると機械工たちの居住地は MTS レーリクであればレーリク市に、MTS ラーヴェンスベルクであればノイブコフ市に、時期はずれるが MAS イエーネヴィツであればクレペリン市に集中している。いずれも管区内の中核的な小都市である。これらのことから、機械工たちは農村部よりは都市の工業労働者世界につながる人々であったことは間違いない。これに対してトラクター運転手をみると、まずその最大の特徴は、彼らがほぼ 1930 年以降に生まれた人々で占められること、すなわちその若さにあることがわかろう。その比率は実に MTS レーリクで 75％、MTS ラーヴェンスベルクで 60% である。一般に青年ブリガーデが設置されるのもこうした運転手の若さを反映している。また居住地をみると機械工にみるような小都市への集中はみられず、ほぼ管区全域に散らばっている[21]。トラクター運転手がどのような階層の出自であったかの確定は難しいが、このことから彼らが地方都市の工業労働者だけでなく、相当数の「農民の子息」たちを含む集団からなっていたことは間違いない[22]。要するにトラクター運転手たちは、かなりの程度まで農村の青年層に重なる人々であったのである。なお、党員比率は機械工に比べるとかなり低いが、ただ母数が多いので絶対数は必ずしも少なくはなく、また後述するようにブリガーデ長など要職つく場合は党員となった。全体として、党員構成

における機械工比率の大きさに象徴されるように、MTS 組織のヘゲモニーは小都市の工業労働者の文化世界にあり、その元に農村青年層がトラクター運転手として組織されていたとみることができよう。ただし男の世界であったことはいうまでもない。女性のトラクター運転手は、実際にはまれである。

3．MTS の党カードルたち　―新支配層の政治世界―

(1) カードルの党内権力闘争　―MTS 内の「党生活・党政治」―

1950 年代、設立間もない MTS は経営的にも政治的にも安定した世界とはほど遠く、党カードルたちの内部対立や除名・失脚事件が頻繁に生じている。党指導部会議および党員総会の議事録からは、そうした不安定な時期における MTS 内のトップの権力闘争のありようが浮かび上がってくる。MTS 内の権力闘争は主として経営トップの MTS 所長と政治課指導者を軸に展開されていく。以下、まずはこれらの党内権力のありようを通して、MTS 内部の政治的「安定」が、どのような形で実現されていったのかをみていきたい。

MTS 内の経営幹部と政治課との対立がもっとも明瞭に観察されるのは、MTS イエーネヴィッツである[23]。本 MTS はすでに MAS 設立期よりラシャートが所長をつとめており、所長の交代は生じていない。しかし 1953 年 5 月の政治課の報告文書ではラシャートの政治課指導員に対する態度が横柄であるとされている。そして「6 月事件」後、経営幹部と政治課の対立が顕在化することとなった。

1953 年 9 月、根菜類収穫において、指揮系統の混乱や不慣れな新型機械導入によって収穫作業がうまくいかなかったのだろう、その責任をめぐって所長ラシャートと政治課副指導者ギルラートの間で対立が起きている。さらにその 2 ヶ月後の 11 月、自己批判・相互批判をテーマとする経営党組織の「報告・選出集会」[24] の席上、ラシャートが、「ギルラートが自分は LPG に加盟していなくてよかったと発言した」と告発。ギルラートはこの発言を全面否定し、女性政治課指導者ゼーガーもこれを支持するものの、翌 1954 年 1 月の党指導部会議では、郡党指導部ゼンクピールの同席のもとギルラートの問題発言が事実として確認され、これによりギルラートは副指導者のポストを解任、村長職に異動を余儀なくされている。

ところがその直後の 1954 年 2 月 15 日の経営党員集会おいて―この時は郡党指導部から 3 名が参加している―、今度は逆にゼーガー女史がラシャートを告発している。理由はディートリヒスハーゲン村の LPG 集会にてラシャートがゼーガー女史批判の文書に署名をするよう参加者に働きかけたという内容であった。翌 3 月の党員集会では、やはり郡党指導部ゼンクピールが出席してラシャートを批判、県行政部の決定としてラシャート解任を伝えた。しかし注目すべきことに、党指導部によって提案されたラシャートに対する党内譴責処分案は参加党員の反対多数で否決されてしまっている。これは現場の経営党員が郡党指導部や政

治課ではなくラシャートを支持したことを意味しよう。この会議からまもなくして本 MTS には新しい所長が赴任、ラシャートは 1955 年に MTS レーリク管区「全権代理人」に異動していることが別文書より確認できる。しかしその挫折感は深かったのだろう、この直後の 1955 年 6 月、ラシャートは「共和国逃亡」を決行するにいたるのであった[25]。他方のゼーガー女史もほぼ同時期に党内文書からは名前が消えており―彼女は政治的な押しの弱さが弱点と評価されている[26]―、代わって 1954 年に MTS レーリクから党派性の強固なプラーゲマンが政治課指導者として着任、その政治力によって MTS 政治的安定化がはかられていくことになった。本 MTS ではその後も一貫して MTS 所長の指導力は弱いままである。

以上の事例で注目したいのは、第一に 50 年代初頭の対立が経営の不安定性を背景としていたこと、第二に郡党直結の政治課正副指導者に対する現場党員の不信がみられること、第三にトップ・カードルの入れ替えを契機に、1954 年を転機として政治的な安定化がはかられていることである。とくに 1953 年前半は政治課副指導者は農村国家保安部の仕事を兼務していたといわれている[27]。その意味でも、ラシャート解任に対する反発とその後のギルラート更迭は、郡党指導部に対する MTS 党員の不信感が「6 月事件」を契機に表面化したものといえよう。

次に MTS レーリクについてみてみよう[28]。ここでは 1952 年 10 月、MAS の MTS 移行に伴う政治課設置のさいに、上記のプラーゲマンが 44 歳で政治課指導者のポストに配置されている。腹心の党書記ヴィックとともに彼は強力な政治力を発揮し―二人とも年配である―、「6 月事件」直後も MTS イエーネヴィツにみられたような党内闘争は生ぜず、表向きには政治的動揺がほとんどみられない。しかし、それは MTS 経営の安定さを意味するわけではまったくなかった。後の回顧的な報告によれば「1952 年以降、政治的に熟練した人材」に「手痛い損失」が生じ、彼らのうち、なおも党と国家機関で働いているには 12 人にすぎず、この穴は埋められてはいない、とあるのである[29]。じっさいこの MTS の不安定さは所長の頻繁な交代に現れている。1952 年から 1953 年の所長ブロック（30 歳）は父が大農であることを隠蔽したとして解任され、その後に就任した技術畑出身の所長オールも、1954 年冬、「嘘をついた」として党内譴責処分をうけたあげく、同年 4 月にはその職を解かれている。さらにこの後任である工業出身のフォイクに至っては、イデオロギー的に脆弱であるとの理由でたった 4 ヶ月で解任されてしまった。ようやく同年 8 月に党派性が強固なクレンツ（43 歳）が所長に就任することで MTS 秩序が安定し、クレンツはその後 1959 年の MTS 解散時まで所長ポストにあり続けている[30]。興味深いのは、このクレンツの着任に呼応するかのように政治課指導者プラーゲマンが、上述のように MTS イエーネヴィツに異動し、その安定化に従事することになる点である。この両者の動きは、後に述べるように、郡さらには県全体の党カードル再編の一環であったと思われる。ただしプラーゲマンもクレンツもその政治力は強固だが、その分、反発もかなり強い。プラーゲマンは 1953 年 10 月の MTS 党指導部役員選挙で落選しているし[31]、クレンツにいたっては、1956 年と 1957 年に

MTS 内外から批判が公然化している。

MTS ラーデガストについても類似のことがいえる[32]。ここでは MAS 時代には SED 党員が 12 名と政治基盤が脆弱であったというが、その後 SED 党のヘゲモニーが確立したとされる。この過程でロッゲが所長に就任し、以後、長期にわたってこのポストについている。議事録をみても各種会議におけるロッゲの発言力は強い。1955 年 12 月には、なぜロッゲが党書記を引き受けないのかという質問に対し、政治的に最も強力な人物の党書記就任は経営と党の一体化をもたらす危険があるからとの指摘がなされているほどである。ただしその強さはここでも不信感を伴っており、1954 年には彼の酒癖と女癖の悪さが批判され、1955 年には自らのバイクに LPG 所有のガソリンを勝手に給油したとして党内処分を受けている。16 歳で党員候補、18 歳で正党員となったこと、また「専門的なことはわからない」と自ら発言していることから農業知識は乏しいと思われること、以上からロッゲはクレンツと同じく戦後直後から政治カードルとしてのキャリアを積んできた人物であるとみていいだろう。彼もまた、もっぱら政治的力量を評価されての所長就任であった。

(2)「処分」される人々　―スターリニズムの実践と反発―

プラーゲマン、クレンツ、そしてロッゲ。彼らはいずれも家父長的な名誉や温情の観念とは無縁であり、党派性は強くとも MTS 経営内の信頼調達能力が不十分な政治カードルであった。この点を補うためと思われるが、他の党カードル層の政治的排除が頻繁に行われている。さきに述べたように「6 月事件」直後には、従来の党活動の反省として「自己批判」・「相互批判」の手法が党生活に導入されるが、この政治手法の採用は、非スターリン化による党権威の失墜が党内の上からの圧力を内向化させることになるのだろう、皮肉にも党内粛正を加速する結果となった。このため党カードルたちは過酷な世界に生きることになる。

党内批判にさらされる理由としてまず第一にあげられるのは性道徳とアルコール問題である。たとえば MTS ラーデガストでは 1954 年、LPG ハンストルフ駐在の MTS ブリガーデ長パヒョレックが、妻と別居し同村で若い娘と同棲をしているとして批判にさらされている[33]。MTS 党指導部は、愛人との関係を清算するために職場異動をパヒョレックに提案するが、当人はこれを拒否。このため党指導部はパヒョレックを除名処分とし、さらに異動提案を拒否し続ければ MTS を解雇すると述べている。パヒョレックの人物評価に触れたさいには彼が大酒飲みであることが強調されている。もちろんここでは性道徳やアルコールは問題の一部に過ぎず、事の本質は党指導部が彼を MTS の逸脱分子と認識したことにあることは間違いないが、この点を認めても男子党員の性モラルについて各 MTS 党指導部は過剰ともいえる反応をしばしば示すのである。たとえば同じく MTS ラーデガストのケプケが党員候補を申請したさいには、妻との不和や若い娘との噂話が問題にされているし[34]、MTS レーリクのシュタンゲも若い娘と一晩過ごしたことについて党指導部会議に呼び出され事実関係の釈明を求められている[35]。後年の東ドイツにおける性的解放の進展度合いを知る者には

意外かもしれないが、党指導部はこうした党員モラルに敏感であった。スターリニズムの体質の現れともいえるが、1950年代においてはこうした性モラルが農民的世界においてなお共有されていたためかもしれない[36]。

政治的背景がなく単に能力を見限られたことによると思われる党カードルの更迭や不本意な異動となると、これは日常茶飯事である。政治力に乏しいMTS所長が成績不良などを理由として頻繁に解任されたことは先にみたとおりである。さらに1955年3月、MTSレーリク技術部長のリュトケは、修理工房において従業員から技術部長として認知されていないとして解任されているし[37]、MTSイエーネヴィツのブリガーデ長パソーは、期待されたブリガーデ作業の改善を達成できず、むしろ配下のトラクター運転手から「一緒に仕事をしたくない」と嫌われる始末で、このため短期で解任されている[38]。

こうした支配手法に対して、MTS末端党員たちの態度は両義的である。なによりしばしば指摘される会議での沈黙こそは彼らの怯えの表現でもあるが[39]、まれに党会議において単発的な形で党指導部に対する異議が表出する場合がある。たとえば1957年2月のMTSイエーネヴィツの党「報告･選出」集会では、議長から発言を促されてのことだが、ハーダーが、作業場指導者で良き労働者あったユングクラースが解雇されたことには同意できないと発言、同じくケッペンが「どうしてユングクラースとネーヴァーが解雇されたのか、経営では今に至るまでみんな知らない。ネーヴァーは本当にいいブリガーデ長だった」と述べている[40]。

しかし、他方で、末端党員といえども党員であることの利害も明確に意識しているも見逃してはならない。やや特異な例だが、MTSレーリクの重度身体障害者シュトルップは、1956年8月、脱穀機運転手の仕事を外され警備員に回されたことに対して「冷遇されている」と強く反発、離党を表明した。党指導部は、配置換えの理由として、夜になると目が見えなくなり脱穀作業中に事故を起こしたこと、また機械メンテナンスの知識も乏しく脱穀コストが極端に高くなることをあげている。党指導部会議で離党表明の説明を求められたさいにシュトルップは、自分が脱穀労働者にこだわるのは彼が豚を飼育しており脱穀過程で生じる「屑穀物」を飼料として得たいためであると告白している。結局、警備員の方が安定的所得を得られると諭され、シュトルップは離党を撤回している[41]。身障者ゆえの不安にも突き動かされてであろうが、彼の入党動機が人事上の便益を期待できるとの考えによっていたことは明らかであろう。

MTSレーリクのトラック運転手ヤーンケの離党表明も類似の事例である。ヤーンケはトラック運転手からトラクター運転手に異動させられたことに強く反発して党員証を返却するのだが、党指導部会議の席上、彼に対しては、娘が労農国家の費用で大学に行っているからお前は党員として活動しなくてはならないとか、さらには「離党表明を撤回しないととても愚かなことをすることになる。この大規模社会主義経営で仕事をみつけることがとても難しくなる。ここでは採用を党が決定しているのだから、こんな形で党から離れた人間は拒絶さ

れるぞ」などと説得がなされている。結局、ヤーンケはこうした見解を受け入れ、離党表明文書をその場で焼却処分することになるのだが、そのさい興味深いことに彼の党費滞納分を党指導部員 3 名が肩代わりすることで決着している[42]。ここでは党派性は棚上げされ、SED 党員たる利益が露骨に共有されていたといえようか。

4．農業技師とトラクター運転手　―大規模機械化農業の担い手たち―

（1）農業技師

戦後東ドイツでは、1950 年代に入って農業指導者養成機関が整備されるようになった。1953 年に LPG 指導者育成の単科大学がマイセンに設立され、1954 年には MTS 指導者養成を目的とする農業経済研究所がポツダムに、さらに LPG や MTS の党員農業指導者を育成する党機関として党中央学校「アウグスト・ベーベル」がシュベリンに開設されている。そしてこれに呼応するように各県には農業専門学校が設立されていく[43]。クレムによれば「1963 年には約 4000 人の大学卒業生と 1 万 7000 人の専門学校卒業生が社会主義農業に従事していたが、その大部分が東ドイツ農業教育施設で養成された人々であった」という[44]。こうした新農業教育制度を通して育成された人々が、1950 年代後半に登場する MTS の若手の農業技師たちであった。彼らこそは 1950 年代をこえて、その後の東ドイツ農業を担う新時代の農村カードルとなっていくのである。

ところで、農業技師は、同じく MTS カードルといっても、所長や政治課指導員などの政治カードルとは性格を異にしている。彼らは農業の現場に責任を負う農業テクノクラート―技術カードル―であり、技術能力を武器にある程度自立的な振る舞いをする傾向がみられるのである。この点を比較的よく示しているのが、1952 年から 1956 年まで長期にわたって MTS レーリクの上級農業技師であったリピンスキーであった。 MTS には複数の農業技師が従事しており、各技師は数か村を割り当てられ、LPG や村に入って春秋の播種耕起や収穫・脱穀などの一連の作業計画の作成と遂行に責任を負うが、これらを MTS 管区全体として統括するのが上級農業技師であった。

リピンスキーは 1899 年生まれの壮年 SED 党員で農業知識が豊富と評価されており、1952 年に郡で最初の LPG ヴィヒマンスドルフの設立と運営に関わるなど、当初より当該管区のトップ農業技師であった。ただし胃の持病のために活動には限界があり、1953 年 10 月にはこの点を理由として解任話までが出ているが、実際にはこの職にとどまり、リピンスキー自身、健康回復後には新路線に全力を尽くすと述べている。しかし、翌 1954 年 5 月には、今度は、健康上の理由、家族との別居状態、若い農業技師と同じ賃金等級であることに対する処遇の不満をあげて自ら辞任を申し出ている。この時は指導部から「農業技師課のバイクを利用して定時に経営食堂で食事がとれるようにしてはどうか」との提案がなされる形で慰

留され、本人もこれを受け入れている。

注目すべきは彼の党派性は強いとはいえず、無限定な政治的忠誠を示していない点である。たとえば1955年3月の党年次事業報告では、新農法―「じゃがいも箱床育苗方式」―に対して懐疑的であり、また政府の単収増産方針に従わなかったとして、プラーゲマンから批判されることになった。この結果リピンスキーは「党の立場からMTS農業技師としての課題を自覚するために」、同年7月に郡党の研修を受けさせられている。またリピンスキーは、党指導部会議にはオブザーバーとして頻繁に参加しているものの、判明する限り党指導部委員には選出されていない。このようにリピンスキーの特徴は、数少ない年配農業技師であること、新農法の拒否にみられるように専門職エートスが優位で党派性に乏しいこと、にもかかわらずなかなか解任されないことである。この点は先にMAS時代の農業技師について指摘した特徴―相対的な高学歴と専門性―と対応するだろう(45)。

リピンスキーは戦前系譜の農業技師といえるが、他方で同時期のMTS レーリクには政治的党派性が顕著な若手農業技師の台頭がみられる。具体的にはパプストとゾーヴァルトであり、いずれも農業技師補佐としてMTSに採用されたと思われる。とくにゾーヴァルトはドイツ自由青年同盟の活動に従事する一方で、1952年のリピンスキー病気休職中にその代行をつとめている。MTS経営が不安定なもとで若手政治カードルの育成が切に求められたのだろう、1953年、彼ら二人は党員候補から正党員に格上げされ、翌54年にはパプストが郡党学校に派遣されている。そしてその直後にパプストは政治課指導者プラーゲマンに随伴する形でMTS イエーネヴィツの政治課副指導員に、ゾーヴァルトは「農業課指導者としての活動が評価されて」郡党指導部に昇進している。そしてその後、とりわけ1957年以降、後述するように二人ともMTS管区指導員として全面的集団化運動の中核的な担い手になるのである(46)。

農業技師補佐から直線的に政治カードル化したこの二人とはやや異なる姿勢をみせるのがMTS ラーデガストのテーネルトである。彼は1954年10月頃、当該MTS党組織立て直しを目的として配置された「専門知識をもった若い党員候補」の一人であった。1955年1月には他の若手候補とともに正党員になり、農業技師として党書記に選出されている。そして同年11月には、その能力と活動が評価され上級農業技師への就任を求められるが、しかしここで彼はこの要請を拒否してしまう。その理由は、上級農業技師と党書記の兼務は負担が重すぎること、また自ら従事するMTS支所のある集落に住居を得たため、ここで農業技師としての仕事を続けたいからとしている。さらに同年12月には、通信教育の継続と農業技師であり続けたいとして党書記再任をも拒絶している。パプストとゾーヴァルトが1950年代前半の農業技師補佐だったのと異なり、1950年代中葉に登場するテーネルトは新教育制度の農学校を卒業した若手農業技師であったと思われる。その分、政治的党派性よりもテクノクラートとしての自負心がより強固であったといえようか。いわゆる新農法についてもリピンスキーと同じく「実施においては問題だらけ」で、「もっと正確に仕事をしなければな

らない」と批判的発言をしている。とはいえ、ここでは、そうした若き農業テクノクラートが党書記としてMTS党活動を支えたことの方に注目しておきたい[47]。

1950年代中葉の若手農業技師のキャリアとしてもっとも一般的であったのはLPG組合長になることである。テーネルトのその後のキャリアは不詳であるが、1957年6月発行のMTS イエーネヴィツ発行の村新聞には「私はLPG組合員となった」というタイトルの記事が掲載され、ここに若き農業技師エーメの来歴が紹介されている[48]。それによればエーメは1951年に義務教育を終えたあと、同年9月から1953年8月までケムニッツの国有農場で農業見習い、さらにその後、ケムニッツの農業専門学校で2年、ライプツィヒの専門学校で1年、計3年の教育課程を受けている。卒業時にメクレンブルクで農業技師となることを希望し、MTS イエーネヴィツに配属。1956年8月1日より農業技師補佐としてアドマンスハーゲン、バルゲスハーゲン、バルテンスハーゲンという3つのLPG―第8ブリガーデの管轄である[49]―を担当したという。1957年1月26日、LPGバルゲスハーゲンの組合長に推薦され、同年3月6日にMTSを辞して同LPGに加盟し、その場で組合長となったと書かれている。

おそらくこれは当時の若手農業技師のキャリアの典型に近いと思われる事例である。表4は、やや時期が下るが、全面的集団化が完了した1960年のMTS イエーネヴィツ管区におけるⅢ型LPGの組合長一覧である。1958年1月、第2回MTS中央大会において「さらに4000人のMTS農業・畜産技師」をLPGに派遣する方針が打ち出されるが[50]、このリストにこの方針の表れをみるのは容易であろう。みられるように14のLPGのうち半数の7つのLPGにおいて組合長が「国家認定農業者」または畜産技師となっており、またその多く

表4　バート・ドベラン郡Ⅲ型LPG組合長リスト（1961年）

LPG	組合長氏名	年齢	所属政党	資格
レートヴィシュ	ピーパー , W.			
キューリングスボーン	グロース , F.	61	SED	
レーデリヒ	ライマー , J.	29	SED	県党学校（BPS）卒
クレペリン	シェーンロック , E.		SED	国家認定農業者
ホーエンフェルデ	ヤーチュ , F.	31	DBD	学士取得畜産技師
シュテフェンスハーゲン	グローガー	29	SED	国家認定農業者
ヒンターボルハーゲン	テーゲン , P.	59	SED	国家認定農業者
グラスハーゲン	ゼンク , M.	52	SED	行政学校卒
バストルフ	ブルクハルト , M.	60	SED	国家認定農業者
ブロートハーゲン	ドルゲ , G.	48	SED	
ブルソー	ハーンケ , A.	27	無党派	国家認定農業者
アドマンスハーゲン	レヴェック , H.	28	SED	通信制の学生
パーケンティン	ヘルフ , U.	28	SED	国家認定農業者
イエーネヴィツ	シュヴァイツァー , W.	33	SED	

注　：原表はLPG幹部会委員活動状況報告における各LPG幹部人事案のリストである。
出典：VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, S.164-171より作成。

が 20 代前半から 30 代前半と大変若くなっている。「国家認定農業者」は必ずしも MTS 農業技師とは限らないが、このうち若い組合長 4 名はその可能性が高い人々である。じっさい、LPG ホーエンフェルデのヤーチュは 1957 年に MTS 畜産技師から、LPG シュテファンスハーゲンのグローガーは 1957 年に MTS 上級農業技師から、LPG パーケンティンのヘルフは 1960 年に MTS 上級農業技師から LPG 組合長となっている。興味深いことに 3 人とも党からの評価はあまり芳しくない。ヤーチュはもともと SED 党員ではなくドイツ農民党員であることもあり政治的に問題があると評価されているし[51]、グローガーは 1957 年 11 月に MTS 非難の舌禍事件を起こして MTS 党員総会で非難の矢面に立たされている。そのさいには「トラクター運転手たちがグローガーはフィーヴェック理論―小農主義的な修正路線のこと（引用者）―の支持者とみなしている」との発言がなされている。ちなみにグローガーの組合長就任については、前組合長のケスターが MTS 主導の突然の組合長交代であったとして入院先から雑誌『協同組合農民』編集部宛てに、1958 年 5 月 2 日付で告発文書を送りつけている[52]。この若いインテリ技師は LPG 組合員と MTS の双方から厳しい視線にさらされていたということだろうか。ヘルフについても上級農業技師時代に、農民たちから「バイクを飛ばし、カバンにお金をいっぱい詰めていて、そのくせ勤労農民とは話をしない」と非難されたとの報告を見いだすことができる[53]。

このように、新制度の若手の農業技師たちは、郡党政治カードルへの有力な人材供給源でありながら、同時に農業テクノクラートとしての自負心を旺盛にもちつつ LPG 組合長となる人々もいた。このためその行動には、リピンスキーのような伝統的農業技師と同じくある程度の自立性をみることができる。ただし、農業技師の LPG 組合長化は一律に行われたわけではなく、1950 年代半ば以降は主として集落農業経営の吸収・転化型 LPG や少数脆弱新農民型 LPG に、さらに全面的集団化期には大規模 LPG に投入されたのであり、逆に優良新農民を担い手とする I 型 LPG に彼らが入る余地はなかったといってよい。上記のように村民たちの視線も必ずしも受容的とはいえないが、農業テクノクラートは MTS を経由する形で村の LPG 経営の主導的立場を担うことになっていくのである。

(2) トラクター運転手など

トラクター運転手たちに移ろう。すでに述べているように、彼らは MTS の実働部隊の中核であり、MTS の拡大とともにますます MTS 従事者の多数を占めることとなった。MTS の労働組織をめぐる問題に関しては次節で詳しく論じるとして、ここでは農村カードル論の視角からトラクター運転のキャリアについてみてゆきたいが、そのさいに特に興味深いのは、農業技師とは異なり政治カードルとして社会的上昇を果たしていく例が、運転手の場合、その絶対数が多い割には意外に少ないということである。

MTS レーリクの場合、トラクター運転手出自の MTS 党カードルとしてはヴィックの例があげられる。ヴィックは 1904 年に地元集落のクライン・ニーンハーゲン村に生まれてい

る。前職は不明だが、1941 年から 45 年まで兵役についているので終戦に伴い復員したと思われる。1952 年から 1954 年まで MTS 党書記をつとめており、政治課指導者プラーゲマンを側面から支えている。二人の関係は、所長がヴィックに対して「プラーゲマンの子分」と中傷するほどに蜜月であった。その後 1954 年に党学校に通ったあとに政治課副指導者になり、さらに 1955 年、プラーゲマン異動後のあとを埋める形で当該 MTS の政治課指導者に内部昇進を果たしている。しかし早くも同年 11 月にはその仕事ぶりが批判されることになり、1956 年からは MTS 文書からヴィックの名前が登場しなくなる。他方で 1956 年から 1957 年に同管区内の LPG ガースドルフの文書にヴィックという名前の組合長が登場している。この集落は当該 MTS 管区内においてもっとも厄介な集落とされていたから、そのテコ入れにヴィックが派遣されたとも考えられよう。ただし、LPG 立て直しに失敗したのだろう、その在任期間はきわめて短い(54)。

ヴィックの事例は例外的ともいえる年配の運転手のものであったが、同じ MTS レーリクの若手運転手のうちでもっとも政治カードル化した例としてはアウグスティンがあげられる。彼はハーメルン近郊の農村に 1929 年に生まれている。1953 年、MTS レーリクの第 6 ブリガーデ長として党指導部委員に選出され、翌 1954 年に運転手から管制主任の管理職に昇進、同時にヴィックの後任の党書記として MTS 党活動の中軸を担っている。1955 年前半にはヴィスマールの党学校を受講。ところがその終了後に、研修教師の就任要請を拒否している。また党指導部役員選出も過剰負担だとしてこれを辞退、その後 1957 年には当該 MTS 管区指導員として従事していることが確認できる(55)。アウグスティンの他に運転手出自で党カードル化する例としては、MTS 経理に昇進した MTS ラーデガストのタウガーベック（年齢不詳）があげられるが―1954 年に政治課指導者、1960 年に MTS 党書記であったことが確認できる―、他にめぼしい事例はみつからない(56)。

ヴィックもアウグスティンもタウガーベックも、運転手出自で党書記や指導員となる形で政治カードル化している例である。ただし農業技師たちと異なり、自ら拒否して MTS 内にとどまったり、あるいはヴィックのように挫折を余儀なくされている者もいる。少ない事例なので軽率な判断は避けるべきだが、とくに若手のトラクター運転手の上昇機会は意外に乏しいものだったのではないかと思う。逆に、トラクター運転手から人民警察に派遣されたものの不適応を起こして MTS トラクター運転手に戻るケースや(57)、戦後村党書記をつとめたあと同じく人民警察に派遣されるものの不適応を起こして解雇され、その後 MTS トラクター運転手になる若者がみられる(58)。これらの没落パターンもトラクター運転手の政治カードル化の限界を裏側から示しているように思われる。

さて、政治カードルとはいえないが、MTS 経営組織において重要な役割を担っていたのがトラクター運転手の現場リーダであったブリガーデ長である。彼らこそが MTS 労働を現場で支える責任者たちであったといってよい。では、いったいどのような人々がブリガーデ長となったのだろうか。

そこでまず前掲表3に再度戻って、二つのMTSのブリガーデ長とトラクター運転手の出生年の欄をみていただきたい。トラクター運転手が1930年代以降の生まれと圧倒的に若いのに対して、ブリガーデ長の多くは1920年代生まれに集中していることが一目でわかろう。両者の対照性が鮮やかだが、これは単純に現場リーダーとしてまずは年齢が重視されたことを物語ろう。

さらに、先にMAS修理所の工業労働者との対比でトラクター運転手の党員比率が小さいと述べたが、ブリガーデ長についても党派性の弱さが一貫して問題となっている。有力党員のブリガーデ長としては、MTS レーリクの第3班ブリガーデ長で党指導部員だったメルヒゼデヒが1909年トリア近郊生まれ、「高い組織化能力によりブリガーデ作業を顕著に向上させた」として1953年に活動家認定をうけた同MTSの第1班ブリガーデ長のシュメーリンクが1907年ハンブルク生まれ、MTS イエーネヴィツで一貫して党指導部委員でありつづけたブリガーデ長ラインケが、1904年にリューネブルク近郊の生まれである(59)。彼らは西部生まれの工業労働者出自の年配ブリガーデ長という点で共通しているが、実は彼らを別とすれば、有力党員のブリガーデ長は少ないのである。1950年代後半のMTS レーリクについては「五人いるブリガーデ長のうち誰も党員候補として獲得することができず、また多くのトラクター運転手やブリガーデ長も自身が農民の息子であり、このため最繁忙期においてMTSはなによりも農業の社会主義セクター安定化に貢献しなければならないことを彼らが理解しようとしない」とされており(60)、ブリガーデ長の党組織化が進捗しないことが嘆かれている。ブリガーデ長は、現場リーダとして年齢が重視されたが、政治的な志向については、一部の工業労働者出身者を除き、全体として政治カードル化志向や党派性の弱さという点で他のトラクター運転手と同じ傾向を示した。その意味で彼らは一部を除きトラクター運転手の世界に帰属していたといえる。

こうしたトラクター運転手たちの行為の特徴は、その流動性の高さと対応していた。MTSイエーネヴィツについてはトラクター運転手の流出一覧を示す1955年6月21日付文書があり、各運転手の氏名、居住地、「移動先 Wohin」が記載されている(61)。そこには、まず第一に、複数年度分の記載である可能性もあるとはいえ、1955年時点で従業員数118名を数えたMTS イエーネヴィツにおいて、流出運転手として16名という多数の名前が記されている。しかも、第二に、このリストにある名前は1952年のMAS運転手リストにはみられず、また第三に、その「移動先」としては、森林経営2名、人民警察1名、販売所1名以外はすべて「不明」とされている。この場合、「不明」が、文字通りの行方不明を示すのか、それとも単に「異動先が未調整」という意味にすぎないのかはこの文書だけからはわからない。しかし別の郡人民警察の文書に1955年6月から1956年2月までの期間にMTSイエーネヴィツの「共和国逃亡者」が6名と記載されていることを考えると、文字通りの行方不明の可能性が高いのではないかと思う。全体として運転手の移動性がMTS指導部が管理できない水準であったことは否定できないだろう(62)。

MTS トラクター運転手の職は、単に戦後農村の貴重な雇用先というだけではなく、新時代の機械化農業を象徴する新しい雇用先であり、さらにまた大型マシンを操作することは、親の世代とは異なる生き方として農村青年の自負心を刺激する側面があった。さきに強調した党派性の弱さも、あくまで MTS 内の他のグループと比較してみた場合の特徴であって、MTS に採用されることは農村の SED 支配を肯定的に受容することを意味したであろうことは否定できない。とはいえ、男子の労働力不足や運転手不足のもと、労働市場における青年労働者のバーゲニングパワーは強く、彼らの流動性は高かった。1950 年代を通して、農村青年の離村は継続しており、農村からの「共和国逃亡」の主要部分は青年層に他ならなかった(63)。こうした点も運転手出自の政治カードル化が意外に少ないことの一因であったろう。労働市場の動向に敏感に反応する点に、学歴を媒介に農村の「新中間層」にステップアップしていくであろう農業技師らとは明らかに異なる彼らの行動の特性をみることができよう。

MTS 経営の側から見ると、この点はトラクター運転手の調達困難であるとともに、トラクター運転手の質の問題として自覚された。後述のように、コンバインやジャガイモ一貫収穫機など大型機械作業のずさんさは多くの農民たちの怒りを引き起こしたが、さらに深刻だったのは飲酒運転や空走行など劣悪な労働モラルの問題である。1954 年の MTS ラーデガストの事業報告では、所長ロッゲの党処分を契機に労働規律が乱れ、その結果、作業中の飲酒やトラクターの空走行が横行したことが指摘されている(64)。また、同年 11 月の MTS イエーネヴィッツ報告では、ドライブ気分での運転が高コストの原因であると指摘されている(65)。

こうした労働規律問題に対する対処としていかにもスターリニズム的なのは、これを運転手の「開発」によって解決すべしとのイデオロギッシュな言説が前面に出される点であろう。1955 年 6 月 27 日、MTS イエーネヴィッツの党指導部会議において政治課指導者プラーゲマンは、修理プログラムの未達成問題に関わって党指導部が研修を軽視したことを批判、カードル育成の重要性を指摘しつつ、「例えば機械工、交代運転手、脱穀ユニット指導者は研修がなければ存在し得ないこととなり、その結果、われわれは十分な労働力を使えなくなるのである。…つまり『正しい人間 die richtige Menschen』を開発することが課題である」と発言しているのである(66)。「正しい人間」の開発に政治的な内容が含意されていることは自明であろう。その 4 年後の 1959 年 10 月、MTS 経営党員集会における党員候補のトラクター運転手ビーマンの正党員承認に関する議論では、トラクター運転手としての良好な評判を理由として提案が承認されつつも、彼のイデオロギー的な曖昧さが弱点として指摘されることが忘れられていない(67)。ここでも「有能さ」と「政治的忠誠」が「人間開発」の重要課題として意識されている。カードル化の源泉として「開発」対象でありながら、他方で農村青年のハビトゥスをなお体現する人々、以上の叙述からはトラクター運転手のそうした境界的な像が浮かび上がってこよう。

5．MTS と村落・LPG　―農業機械化の実態―

（1）村の農業機械化のありよう

MTS は SED 党の農村部における政治的・経済的な出撃拠点であった。従ってその意義を論じるには、これまで述べてきたような MTS 内部組織の分析をふまえつつ、なによりも各村落や LPG にとって MTS 活動が果たした役割について論じられなければならない。かつての公式見解のように集団化における MTS の意義を無条件に称揚するのはもちろん誤りであろうが、逆に MTS 機械サービスの機能不全を強調するあまり、これを過小評価することも問題であろう。以下では、こうした両極の評価を克服するために、まず農作業ごとに、農業機械利用のあり方に焦点を定めつつ、各村・LPG と MTS の関わり方を明らかにし、次に 1950 年代中葉における労働組織問題と「ブリガーデ支所」制度移行に関して論じていくことにしたい。

①耕起作業

既述のように 1950 年代中葉において MTS は農村地域のトラクターをほぼ独占する状況に至ったが、他方で各村落の農民互助協会や LPG は脱穀機などの農機具を多かれ少なかれ保有していた。このために馬力と家族労働力を軸とする一部の旧農民経営を除けば、新農民も LPG も農作業を個別経営内だけで完結させることはもとより不可能であり、MTS 依存は経営維持に必要不可欠であった。MTS 依存の仕方は農作業ごとに異なってこようが、比較的単純なのがトラクター単体での作業となる春と秋の耕起作業であろう。そこでまず耕起作業のうちどの程度が MTS トラクターによって担われていたのかをみてみよう。

さて MTS の耕起作業は、春耕前に各農民・LPG との間で作業契約が締結されることからはじまる。これをふまえて MTS の作業計画が農業技師によって立案される。春耕前には春耕準備集会が各集落で開催され、機械整備などの準備状況や作業計画が確認される。そして作業が開始されたのちは作業ノルマを指標としてその進捗度合いが点検されることになる。この点は、秋の収穫・脱穀作業および播種耕起作業についても基本的に同じである。問題は耕作面積のうちどれほどが MTS トラクターによるのかであるが、単純な耕起作業といえどもその推定は実は意外に難しい。というのも一般に作業ノルマやその点検は「契約面積」を指標とするが、たとえば春秋の耕起作業は一枚の圃場に対して犂耕だけでなく砕土などの整地作業や播種作業を行うから、契約によっては二重・三重に面積がカウントされることになるからである。ときに指標として「契約面積」ではなくトラクターの走行距離が使われるのもこうした事情によると考えられる。

そこで「契約面積」に基づく推計を断念して、1954/55 年の秋の播種耕起面積に限って MTS の耕作比率を出してみたのが表 5 である。各管区の農地面積は耕地だけでなく放牧地や採草地を含み、その耕地には秋蒔きの穀物だけでなく、春蒔きの穀物、菜種、クローバー

表５　秋播種耕起作業における MTS の占有率

	MTS 秋播種耕起面積（ha）（イ）	刈り取り面積（ha）	農地面積（ha）	秋蒔き作物の総面積（ha）（ロ）	MTS の耕作比率（ハ）
MTS イエーネヴィツ	2,341 (1)	2,375 (4)	15,777 (6)	4,147	56.5%
MTS レーリク	1,384 (2)		5,732 (7)	1,507	91.8%
MTS ラーデガスト		2,560 (5)	10,964 (8)	2,882	
MTS ラーヴェンベルク	2,008 (3)		9,200 (9)	2,418	83.0%
計			41,655 (10)		

注　：（1）1955 年実績値（Rep.294, Nr.232, Bl.113）（2）1955 年目標値（Rep.294,Nr.245,Bl.271）
（3）1955 年実績値（Rep. Nr.239,Bl.99）
（4）1955 年実績（Rep.294,Nr.232, Bl.211（RS））（5）1953 年実績（Rep.294, Nr.235, Bl.53）
（6）1958 年（Rep.294, Nr.233, Bl.90）（7）1958 年、8 村・25 集落の積算（Rep.294, Nr.240, Bl.118）
（8）計算値：（郡農地面積）－（他 3 管区農地面積計）（9）Rep.294, Nr.240, Bl.22
（10）Rep.200,2.1,Nr.487, Bl.36f. ただし国有農場は含まない。
（ロ）農地面積 × 0.263（算出は本文参照）（ハ）＝（ロ）／（イ）*100
出典：上記の VpLA Greifswald 所蔵文書より作成。

などの牧草、さらにジャガイモ・甜菜・飼料かぶなどの根菜類などの作付け地が含まれる。残念ながら当該郡の作付面積の詳細がわかるデータを未だ発見できていないので、ここでは東独統計書に記載された 1955 年 12 月末日時点のロストク県統計数字を用い、かつ秋の播種耕起面積が秋蒔きの穀物と菜種の収穫面積にほぼ匹敵するとの想定のうえで、総農地面積に対する総秋耕面積の県平均比率 26.3% を算出し、これを当該郡にも適用することとした[68]。なお、本表における各 MTS 管区の秋の播種耕起面積の数値を表 2 で示した 1954 年の保有トラクター数で割ると一台あたりの耕作面積は 35 ～ 40ha となり、おおむね当時のトラクターの耕起能力に匹敵していることから、この数字は各 MTS が最大限にトラクターを稼働させた結果の数字であるとみなしてよい。

以上をふまえて本表において各 MTS 管区の MTS 秋耕比率をみると、もっとも高い MTS レーリクで 9 割、MTS ラーヴェンスベルクで 8 割、MTS イエーネヴィツで 6 割という数字になる。全体として秋耕面積を冬穀物面積に同値したことで数字がやや高めに出ているとは思われるが、耕起作業については、質はともかく量的な点に関する限り、MTS の意義は大きかったことは否定できないと思われる。1955 年春の耕起作業に関する MTS ラーヴェンスベルク政治課指導員の報告において、二交代制によるトラクター運転の実施率の低さを問題視する文脈で、契約を遵守できない場合は、「勤労農民」や LPG が自ら保有する馬で耕起することになってしまうとの警告がなされている[69]。このことは MTS 契約による耕起が支配的であったことを示しているが、同時に個人農の馬耕への復帰がなお可能な状況であったことも意味している。後者の点は、穀物の刈取り・脱穀や根菜類の収穫作業、さらには運搬手段として馬力がなお必要であったという事情を考慮しなくてはならない。

本表にみる三管区の数字の違いの意味はかなり明瞭である。MTS レーリク管区と MTS ラーヴェンスベルクはともに旧騎士領地域に属する高水準の新農民地帯であるが、前者は

LPG 化が早期に進展したところであるのに対し、後者は LPG 化に対する反応が鈍い地域であり、このため個人農の新農民比率がなお高いという特徴があった。MTS イエーネヴィツ管区は旧御料地地域に属しているため他管区に比べ旧農民の比率が高い地域で、このために集落規模も平均 500ha と旧グーツ集落よりも大きい。一般に、MTS への依存度合いは、旧農民、新農民、LPG、集落農業経営の順で高まると推測されるが、この経営形態ごとの MTS 依存の違いがここでは 3 管区の数字の違い、とくに MTS イエーネヴィツにおける MTS 耕作率の低さとして現れている。ちなみに 1955 年春耕作業に関する MTS ラーデガスト管区政治課指導員報告では、4 月 8 日時点の耕起実績総計 168ha のうち、LPG120ha、勤労農民 48ha であり、「大農のところはまだ作業をしていない」と述べられている[(70)]。MTS 耕起作業の党派性は、政策意図をそのまま反映して明白であった。

ラーベンスホルスト村の優良新農民ニムツは、飼料加工など畜産関連の機械が個人保有、牧草刈取り機・刈取り結束機が数人による共同保有、脱穀機が村落農民互助協会の保有であり、牽引力としてはトラクターはなく馬二頭だけであった[(71)]。おそらくは畜産経営に特化する戦略に基づき機械保有形態を取捨選択、耕起作業についてはもっぱら MTS に依存することを前提に経営を組み立てていたと考えられる。「6 月事件」後に大農から MTS 料金の差別化の撤廃要求があることも、同じ経営戦略が有効だからである[(72)]。数多くの MTS トラクター耕作に対する農民側の非難も、もっぱらきちんと稼働しないことに向けられていて、稼働可能なトラクターが需要がなくて放置されるということがらは生じていない。このように、LPG のみならず個人農も含めて、MTS トラクター・サービスの問題はあくまで「供給制約」にあって「需要不足」ではまったくない。西ドイツと同じく東ドイツでもトラクターへの推転は否定しようがなかったのである。

②収穫・脱穀作業

春秋の耕起作業に比べ、収穫・脱穀作業のありようは複雑であり、このため農民・LPG の MTS 依存度も相対的に低くなる。その理由としては、トラクター不足、刈取り結束機・脱穀機の保有のあり方、そしてコンバイン普及の限界があげられる。

そこでまず前掲表 5 を再度見られたい。ここには二つの MTS 管区について刈取り面積を記載しているが、MTS イエーネヴィツの刈取り面積が秋耕面積とほぼ拮抗している。MTS ラーデガストは秋耕面積が不明なため明言できないが、MTS 資本装備と管区農地面積が MTS ラーヴェンスベルクと類似していることからみて、ほぼ同等のことがいえると思われる。秋蒔きと春蒔きに分かれる耕起作業とは異なり、穀物刈取りは夏の時期に一括して行われる。従って本来ならば刈取り面積は冬穀物と夏穀物を合わせた面積、さらにいえばその作付け比率が 6 対 4 であることに基づけば単純計算で秋耕面積の 66% 増となるはずであるが、実際にはそうはなっていないのである。これは 1950 年代中葉のトラクター台数と稼働率ではこの増加分をまかないうる余力がなかったためと解釈するのが妥当であろう。脱穀機の動

力に電力ではなくトラクターが充用されるとすると―これは実際にしばしばみられることである―、トラクター不足はその分だけますます深刻化することとなる。従って耕起作業とは異なり、収穫過程における馬力への依存はなお避けられなかったと思われる。

この点の具体例として1954年のシュテフェンスハーゲン村―新旧農民集落からなる混合村落である―の収穫作業計画をみてみよう。本村には「6月事件」の影響で縮小したLPG（農地面積114ha、16経営、24名）と旧農民経営の放棄地からなる集落農業経営（農地面積366ha、労働者34名）が存在している。このうち収穫計画の対象となるのは「MTSとの契約面積」198.13haであり、その内訳は集落農業経営135ha、新農民63.13ha―14経営相当とみなしうる―からなっている。またLPGについては別途に収穫計画を立てるという。これに対して村の残存旧農民経営の収穫に関する言及はなされていないので、この部分は自力で収穫したと考えられる。

さて、ここで注目したいのは、農民互助協会が中心となってLPG非加盟の新農民と集落農業経営の労働力によって収穫労働力が組織されていることである。計画によれば労働力50名を調達することができ、収穫作業についてはこれだけで十分な数であるとされている。また作業を円滑にするため村の「勤労農民」を7つの班に編制している。そこに書かれている名前は、上記のLPG組合員ではない新農民たちである。また、機械保有については、「刈取り結束機は集落農業経営で稼働可能な状況にある。勤労農民は馬力の刈取り結束機を2台所有しており、これで51.87haを刈り取る予定である」と述べられていることである。これが本当ならば契約面積約198haのうち、約52ha、つまり約4分の1は、実際には新農民たち自身が刈り取ったこととなるのである(73)。

本村LPGとMTSの関わりが不明とはいえ、この事例からは、第一に、本村の収穫過程はもとよりMTSだけで完結するわけではなく、村の労働力動員が前提となってはじめて可能であること、第二に、LPG非加盟の新農民たちが軸となって収穫労働組織が立ち上げられていること、第三に、彼らは自らの機械を保有しており、これによりMTSがカバーできない部分、つまりはおそらく自己保有農地部分を自分たちの馬力で牽引する刈取り結束機で行ったことがわかるのである。刈取り機は19世紀後半より普及し始め、ワイマール期には結束機能付きのものに転換していったといわれるから、グーツ経営はもとより多くの農民経営も自己保有するのが通常であった(74)。そうした機械の賦存状態がこうした対応の背景にあることは間違いない。

脱穀過程については、先に見たように脱穀機は集落農民互助協会ないしLPG保有である場合がむしろ通常なので、脱穀機の修理や、動力としてトラクターを利用する場合を別とすれば、MTSへの依存度は刈り取り作業に比べてさらに低くなるだろうと思われる。表6は、大農村落であったホーエンフェルデ村の1955年脱穀計画書である。1955年は本村LPGが集落農業経営を吸収して一気に拡大し、本村中核集落ホーエンフェルデ村のみならず本村周辺集落イヴェンドルフ村にもLPGブリガーデが設置された年である(75)。この表からは、ま

表６　ホーエンフェルデ村脱穀計画（1955年6月30日）

集落名	当該脱穀機の所有者	利用者	備考
イヴェンドルフ村	1 LPG	イヴェンドルフ村の勤労個人農	任意の日付で
	2 アルヴァルト,H. リーク,O. ラーダー,H.	アルヴァルトとマテウス リーク、クレキング、およびブスヴァルト ラダーとエヴァース	2台の機械で。昼夜とも。
	3 LPG	LPG イヴェンドルフ村ブリガーデ	任意
	4 ラヒョー,P.	ラヒョー	石油発動機
ノイ・ホーエンフェルデ村	5 ルース,A. フラム,H. ヴェーバー,H. シュート,E. ザース,K.	ルース フラム ヴェーバー シュート ザース	昼夜、二台の機械で、自分たちで配分
ホーエンフェルデ村	6 ユルス,A.	ユルス,A.	石油発動機
	7 MTS エラース,H クルート,HH	LPG エラース クルート,HH., クルート,HB, ユルス,B.	機械一台で昼夜、村役場が割りふり
	8 ラインケ,P バイアー,W シーヴェ,G クルート,W オピオルス,E ザース,I	ラインケ クレムピン、バイアー、および村のその他の個人農 シーヴェ	収穫期までに脱穀機を配置することに問題あり。

注　：脱穀班の番号は原文書には打たれていない。
出典：Kreisarchiv Bad Doberan, Gemeinde Hohenfelde, Nr.52,Druschplan, Hohenfede, d.30.06.1955, oh.Bl, より作成。

ず第一に、石油発動機を動力とする二つの脱穀機（4 番と 6 番）については、小型なのだろう、その所有者が単独で利用していることがみてとれる。次にビュドナー集落であるノイ・ホーエンフェルデ村においは、集落で共同所有する 2 台の脱穀機を集落全体で昼夜運転することとなっており、その利用の仕方も集落にゆだねられている（5 番）。イヴェンドルフ集落については、共同所有の脱穀機 2 台を、大農を含む 7 経営が昼夜運転で共同利用（2 番）、また LPG 脱穀機 2 台のうち 1 台が「勤労農民」の共同利用に（1 番）、もう 1 台が LPG ブリガーデ用に利用されており（3 番）、利用における階層性が明瞭である。最後に中核集落ホーエンフェルデ村については、大型脱穀機と思われる MTS 脱穀機を LPG が利用し、大農については、やや読み取りにくいが、自己保有脱穀機で脱穀するエラース経営をのぞき、大農 3 経営が 1 台の脱穀機を村当局の指揮の下で脱穀（7 番）、そして集落のビュドナー経営からなると思われるグループについては、優先順位が低いのか明示的な方針が記されていない（8 番）。

このように本村では脱穀過程が集落、脱穀機の形態、階層性を軸に編成されていることが

きわめて興味深い。MTS 脱穀機を利用するのはホーエンフェルデ村の LPG ブリガーデのみであり（その場合も労働力は LPG 組合員が軸となろう）、その他については村当局の主導のもと、村内にある既存の多様な脱穀機を利用する形で脱穀計画が練られており、村外への依存は低い。もともと脱穀機は、一般的には、蒸気脱穀機時代においては賃脱穀機業者が成立するかたちでの利用がなされたが、ワイマール期になって小型化が進展、さらに 1930 年代末になると電力モーターが普及してくる[76]。刈取り機ほどの個別保有があったとは考えられないが、それでも大農集落では個人ないし共同保有の脱穀機の蓄積があったとしてもまったく不思議ではない。時期はやや下るが、1959 年 9 月の大農村落ハイリゲハーゲン村に関する報告においても、「畜力、刈取り結束機、脱穀機などがあった」ので MTS 支援を必要としなかったと述べられている[77]。

旧グーツ村落である新農民村落については、旧農民集落に比べ MTS 脱穀機の意義は当然高まろうが、労働力の点で LPG や「勤労農民」が中軸となった点は間違いない。興味深いのは、1953 年、一般に脱穀機不足が嘆かれるなか[78]、それがとくに新農民集落で深刻と思われること―たとえば、新農民集落のアルト・カーリン村では 2 台目を MTS に要求している[79]―、および脱穀機の利用が LPG と新農民の村内対立と絡んでいることである。1953 年の MTS ラーデガスト管区について「LPG が存続している村では各村あたり脱穀機が 1 台しかない状態」であり、「このため LPG 農民と勤労農民の間で対立が起きている。MTS は別の村の脱穀機が空けば、すぐにこれを勤労農民が利用できるようやりくりしている」との報告がみられ[80]、さらにまた同年のヴィヒマンスドルフ村に関しても「LPG は MTS レーリクの脱穀機を利用している。LPG は脱穀が終わるまでこの脱穀機を勤労農民に利用させていない。勤労農民は小型の機械を持っていて、それで脱穀することができるからである」と報告されている[81]。MTS 脱穀機による LPG と個人農の共同脱穀はここでもみられない。

ところで、1950 年代中葉以降、新たに登場するコンバインこそは、上記のような集落・LPG 依存型の収穫・脱穀過程を一気に MTS 主導に変えていく可能性を秘めたものであった。自走型コンバインは、ソ連製のものが 1953 年より導入された。それが新時代を感じさせるものであったことは、たとえば 1953 年 6 月、MTS ラーデガストの従業員全員が最寄りのクレペリン駅まで出迎えに行ったとされることに現れている[82]。しかしその本格稼働は国産コンバインの生産が軌道に乗る 1954 年以降のことである。1954 年、ワイマールで E171 型が生産が始まり、1955 年からはその後の主力となる E155 型コンバインが生産される。このコンバインは 1962 年までに総計 6573 台が生産されたといわれている[83]。

しかし導入当初のコンバインの評価は散々であった。コンバイン導入が穀物収穫に大きな損失を出したからである。その損失の水準は、LPG ケルヒョーの組合長によれば 1 モルゲンあたり 1 ツェントナーであるという[84]。MTS レーリクの 1957 年の穀物単収は 1ha あたり平均 26.5 ツェントナーほどであるから[85]、単純計算で約 7% の損失となる。大きな損失を出す理由としてもっとも頻繁に言及されるのはコンバイン投入のタイミングに関する指摘

である。1955 年、LPG メシェンドルフ組合長は、「コンバイン導入のせいで大損害を被った。…雹により穀物の 25% がやられたのが原因だが、もし予定通りの時期に刈取り機で収穫をすませていればこうしたことにはならなかった」と述べたというし[86]、また、1956 年の党活動者会議の席上では、LPG ケーグスドルフについて、もし「馬力の刈取り機による作業をしていなかったら損害はもっと大きくなっていたはずだ」との発言がなされている[87]。これらは LPG の事例だが、「勤労農民」たちについても、コンバインの作業に対して神経質になっており「コンバインが到着するのを待たず自発的に刈取り作業を始めている」との報告がされている[88]。MTS のノルマ主義が「契約」を通して、とくにコンバイン利用を強制される LPG に不利益をもたらしていたのである。コンバイン導入に対するその他の批判としては、小区画地、起伏地、石ころ、雑草の繁茂などが大型機械の稼働を著しく妨げるという圃場条件の制約を指摘するものが目立っている[89]。これらが MTS のコンバイン作業計画を狂わせる大きな要因であったことは間違いない。最後に部品不足や修理能力など整備能力の問題があげられる[90]。

ただし、こうした苦情は導入当初にこそ顕著だったと思われる。投入時期や配置を制約する圃場条件については、経験により改善が可能であろうからである。事実、コンバインに関する記述は 1954 年と 1955 年に集中し、その後は言及の頻度が下がることからも、1950 年代後半にはコンバイン稼働は漸次安定化に向かい、その意義は増していったと考えられよう。1957 年からは複数のコンバインを同じ耕区に同時に投入することで収穫効率をあげることが目指されるなど、新しい投入方法も模索されている[91]。とはいえ、コンバインの台数をみると MTS あたり 1954 年と 1955 年が 2 台、1957 年でも 5 台止まりであり[92]、もとより各ブリガーデに複数台配置しうるような水準には達していない。その点では、当該期の収穫・脱穀過程に関わる問題を MTS 主導で一気に解決するだけの突破力を発揮できるほどの切り札ではなかったといわざるをえない。

③根菜類—ジャガイモを中心に—

ジャガイモや甜菜などの根菜類は 19 世紀後半以来のドイツ農業集約化を代表する作物であるが、それがゆえに季節労働力の不足問題を絶えず引き起こし、最大の労働問題となってきた。ザクセンゲンガーに始まり、第二帝制期のポーランド人労働者、戦時期の強制連行労働者、戦後期の女性東方難民にいたるまで多様な低賃金労働者がその労働需要を満たしてきたのであった。1950 年代もまた例外ではなく、MTS や LPG の社会主義セクターにとって最大のネックとなるのが季節労働者問題であったといってよい。1955 の統計数値によれば、ロストク県ではジャガイモ・甜菜・飼料カブなどの根菜類全体の作付け比率は耕地の 28%、ジャガイモだけでも 16% に及んでいた[93]。いうまでもなく、これらは食用である以上に、養豚の自給飼料として東独食料問題において重要な意義をもっていた。

表 7 をみられたい。これは 1956 年 5 月頃と推定される MTS レーリク管区の各村落のジャ

ガイモとカブの作付け計画面積一覧である。これによれば9村落の作付けノルマ総計はジャガイモ848ha、カブ378haであり、うちLPGがジャガイモで207ha、カブで83haを占めている。これとは別に1954年のMTSによる収穫契約面積はジャガイモ206ha、カブ80haと報告されている(94)。やや強引だが、時期の違いを無視してこの1954年の数値を使えば、MTSがジャガイモ収穫全体に占める比率は24.3%、同じくカブ収穫で21.2%に過ぎないことがわかる。さらにこの表で興味深いのは1956年作付けの実績欄である。そこにはLPGしか記されておらず、農民経営に関する数字がみあたらないのである。LPGの作付け実績値はジャガイモが179.5ha、カブが83haであり、もし原則通りMTS機械がLPG優先で投入されていたとすると、上記の1954年の数値を使えばMTSはLPGのジャガイモ作付けの87.1%、カブ作付けの104%の収穫に関わっていたという計算になる。つまりMTS大型機械による根菜類収穫は、カブについてはなんとかLPG収穫作業に寄与していたが、ジャガイモについてはそのすべてをまかなえるものではなく、いわんや農民経営にまで機械を充当する余裕などまったくなかったのである。さらに、MTSイエーネヴィツについて、1954年の「ジャガイモ収穫は193ha。これは本ステーションが闘争目標として設定した水準の50％に至っていない。カブ収穫機はその能力を全開せず8ha収穫」であったと述べられており、MTS根菜類作業水準の低さはじっさいにはもっと深刻である(95)。

表7　MTSレーリク管区におけるジャガイモとカブの作付け計画面積一覧（単位：ha）

村名	ジャガイモ				甜菜・飼料カブ			
	ノルマ			実績	ノルマ			実績
	総面積	大農	LPG	LPG	総面積	大農	LPG	LPG
ツヴェードルフ	58		26	20	27		10	10
ガースドルフ	98	22	34	24	37	9	12	12
ビュッテルコフ	111	18	27	18	53	12	8	9
バストルフ・ケーグスドルフ	113	4	53	45	57	3	24	23
ヴェンデルストルフ	113	27	19	14	54	18	8	8
ルソー	100				48			
イェルンストルフ	71				21			
ケルヒョー	69		37	37	25		15	15
レーリク	115		12	12	59		6	6
	848	71	207	169	378	42	83	83

注　：1956年5月17日調査分。　出典：VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl.26-27より作成。

ジャガイモ収穫については1954年よりソ連製機械をモデルとしてワイマールで「完全収穫機」の生産が開始されるが、1963年のE649-650型の製造までは技術的にも未完成で労働力動員が不可欠であったという(96)。1954年9月10日、MTSレーリクでは党指導部会議において上級農業技師リピンスキーが根菜類の収穫計画を提案している。それによれば、現在MTSには7台のジャガイモ収穫機があるが、しかし稼働しうるのは4台だけである。さ

らに各収穫機については1日1シフトで1haの収穫作業を基準とし30日で30haをこなす。そしてそのうえで「良好な収穫成果をあげるには、農業技師、班長の指導の下、集落農民互助協会の協力を得て「収穫部隊」を組織すること」が必要であり、その協議は計画一覧に基づき各集落にて実施すると説明している(97)。

この「収穫部隊」はMTSではなく各村・LPGによって組織されることになるのだが、その動員は、収穫・脱穀労働過程に比べても困難を極めた。じっさいこの点に関する記述は非常に多い。1955年秋、MTS ラーヴェンスベルクでは、「郡党指導部が労働力動員に責任をもった」はずなのにそのことに努力していない、「LPGパンツォーでは労働者用に二日分の昼食を用意した」が労働者がやってこない、と報告されている(98)。この文書には当該MTS政治課指導者のヴォルファイルの署名があることから、実はこの記述は自己批判としての含意を持って書かれたものでもあることがわかる。さらにその一ヶ月後の同管区報告でも、ジャガイモがいまだ収穫されておらず、ノイブコフの「収穫事務局」が児童の動員について見通しをもちえない状況である、「収穫事務局からジャガイモ収穫のために児童を集めるといわれていたのに誰も来なかったとLPGガーヴェンスドルフから苦情があったので、収穫事務局に問い合わせたところ、児童たちはクレンピン村の大農プルーターとマイアーのところでジャガイモ収穫に携わっていた。･･･校長とパール同志がでてくることで、子供たちをLPGに確保することができた」と書かれている(99)。

1956年以後も事態の改善は見られない。同年10月には郡農業課自らが、郡全体において労働力不足がジャガイモと甜菜の作付けの制約となっており、「相変わらず大きな問題である」と認めているし(100)、同月9日のレーリク市党指導部支部会議においては、ジャガイモの収穫に関して、「どの村でも村民の労働力がきちんと利用し尽くされていない」、子供たちはLPGではなく日給のよい大農のところで働き、LPG農民の妻たちすら農繁期に就労しない、これらが動員されるレーリク市内の婦人たちの怒りを買っている、という発言がなされている(101)。翌1957年秋についても、ジャガイモ収穫に子供たちが動員されることに対して親たちが反対、とくに子供たちがLPGに宿泊するのに納得せず、毎日の送迎を要求していることが、郡全体の状況として報告されている(102)。さらに、ブロートハーゲン村においてLPGが労働力調達の困難を見越して必要労働力数を3倍に水増して要求するという事態まで発生している(103)。

労働力動員が村やLPGでは全く不可能であり、郡党指導部が前面にたって調整にあたっていること、にもかかわらず村外住民の労働力動員に対する反発が非常に強く調整が難航していることが明白であろう。他方で集落の児童やLPG組合員の妻が大農のもとでの収穫作業に就労していることは、労働力調達の競合のもとで、とくにLPGにとって季節労働力問題が深刻であったことを改めて示している。MTS機械の無力さは根菜類の収穫作業だけにとどまらない。ジャガイモ播種作業おいては、機械では植え付けが浅すぎて人力で掘り返す羽目になったというし(104)、中耕除草においては、作業中に3割ものジャガイモを潰してし

まうなどの大失態を演じて農民たちの怒りや、さらには失笑までを買う始末であった[105]。上記のLPGガーヴェンスドルフではジャガイモ畑が、LPGアルテンスハーゲンではカブ畑が雑草で覆われる状況であった[106]。これらの点は各LPG文書をみても確認できる。そこでは、1950年代後半においてMTSとの調整不足により根菜類作付けの失敗を招き、LPG収益を悪化させた例が散見されるのである[107]。播種・中耕・収穫に至る機械化一貫体系はなお遠い課題であったといえようか。

以上、MTSに関わる農業機械化を作業別に即してみてきた。一方で耕起作業についてはトラクターの意義はやはり大きいといわねばならない。作業が相対的に自己完結的であることもこの点に寄与していたと思われる。これに対して収穫・脱穀過程についてはMTSと村の調整が必要となり、ここに作業計画立案者としての農業技師の役割が意義をもつことになる。ただし村やLPGは刈取り機や脱穀機をおおむね保有しており、これによりMTSの主導性は後退、村やLPGは自己保有機械とMTS機械と村内労働力を上手に組み合わせて対処することとなった。コンバインは将来性がみとめられるが、この時点では台数不足および運転技術と修理技術の未成熟によりMTS主導の普及には限界があったといってよい。最後にもっとも問題点を露呈したのが根菜類であり、それはとくにLPG経営問題に直結していた。穀作優位のMTSであるとはいえ、根菜類に関わるMTS機械の技術は低位であり、季節労働力不足を解消する水準にはとうてい達していない。他方で村やLPGの季節労働力の調達力も弱く、このため郡党指導部の政治力が動員されなければならない状況であった。乱用といえるほどの「兄弟関係Patenschaft」による児童・村外市民・都市労働者の労働力動員もこの点に起因しよう。全体として、MTSは畜産を主体とする優良新農民には比較的有利に作用したが、他方でテコ入れ対象のLPG経営を救う決定的な手段とはならなかった。機械化の促進が上からの政治的な介入を伴わざるをえなかった所以がこんなところにも見受けられるのである。

（2）MTSの労働組織問題　―二交代制とブリガーデ支所―

①二交代制をめぐって

以上、作業ごとの労働組織のあり方をみたが、個々の作業を超えてMTSと村の労働組織のありよう全体に関わって重要と思われるのは「二交代制Zweischichtsystem」の問題と「ブリガーデ支所Brigadeunterstützung」をめぐる動きである。

すでに述べてきたように、当時のMTSは基軸となるトラクターを含め資本装備不足が顕著であった。この問題を解決するためにとられた手段が、二交代制を導入することでトラクターの稼働率を上げることである[108]。1955年10月のMTSイエーネヴィツのトラクター運転手の内訳をみると、基幹的トラクター運転手77人に対して「交代運転手Schichttraktorist」が50名となっている[109]。他のMTSの交代運転手についても、MTSレーリク48人、MTSラーヴェンスベルク53人、MTSラーデガスト63人となっており、交代運転

手の名目上の確保自体は相当数に上っていることがわかる[110]。

二交代制というのは、文字通り、1台のマシンを1人1日8時間として、2人で計16時間稼働させることに他ならない[111]。当時、どのMTS経営も二交代制導入率をあげることに躍起になっているが、二交代制の実施率はなかなか上昇しない。1957年にいたっても、郡党第一書記の弁ではMTSレーリクの二交代制実施率は8%であり、同年7月の当該MTS党員集会において党指導部がMTS経営陣に対して「交代作業」に目を向けようとしないと批判をするような状況である[112]。

しかし、二交代制実施の上で最大の障害となったのは、交代運転手の配置が実質的に難しいことにあった。交代運転手のある程度の部分はトラクター稼働率が飛躍的に高まる農繁期に季節的に従事する運転手であったと思われるが、ここで注目すべきは、彼らの多くが現役の「勤労農民」やLPG農民から採用されていたことである。

農民運転手の第一の問題は、それが農繁期の過剰負担を彼らにもたらした点であった。1954年8月、MTSラーデガストの収穫作業について、交代運転手の「勤労農民」たちが収穫作業の過労のせいで第二シフトに配置することができない、このため刈取り結束機の運転に従事している交代運転手をすぐに第二シフトにあて、「勤労農民」は自分の農地の刈取りについては自らの刈取り結束機で行わせることとする、「こうすることで20-24台のトラクターを二交代制で走らせることができる」と述べられている[113]。やや文意がとりかねるが、おそらくは刈取り結束機を牽引するトラクターの運転に従事している運転手を別作業の第二シフトに回し、MTSが刈取り結束機で行うはずの作業は、疲労を理由として交代運転作業を拒否した「勤労農民」自身が自分で行うこととする、という意味だろうと思われる。同じ文書では、交代運転手問題は「勤労農民」だけでは解決し得ないので、造船労働者に対して冬季期間中に研修を施し、労働ピーク時に彼らを交代運転手として働かせてはどうかという提案までがなされている[114]。交代運転手の調達が困難であることが顕著だが、しかし、この事例にあるように当面は個人農がMTS「契約面積」分の収穫作業を自力で行う形で対処することとなっている。先に収穫過程で述べたシュテフェンスハーゲン村の事例と同じ発想による対処方法といえよう。

こうした交代運転手の不足問題は、同時に熟練不足の問題にも重なる。たとえば1955年4月、LPGシュタインハーゲンでは交代運転手が―おそらく夜間作業中に―キャタピラー型トラクタを転倒させたことに対し、ブリガーデ長が運転手の能力が低いと文句をつけているし[115]、さらに1955年4月、春耕時におけるMTSイエーネヴィツからの報告では、交代運転手の研修が不十分であり、とくに「勤労農民」を運転手とすることには問題がある、基幹的トラクター運転手たちが「交代運転手が何もかも壊してしてしまう。われわれだけで数時間余分に働いた方が二交代制よりも多くを生産することができる」と不満を訴えていることが指摘されている[116]。この記述からは、運転能力の問題が、実はMTSの基幹的トラクター運転手と農民的な交代運転手の対立と重なりあっていることまでが示唆されている。

②ブリガーデ支所の設立と実態　―MTS の分割化―

労働組織における MTS と村落・LPG の調整問題は、上記の交代運転手の問題にとどまるものではなく、MTS 制度の根幹に及ぶものであった。上からの主導で開始されるいわゆる「シェーネベック方式」運動こそが、そのことを雄弁に語っている。ヴィレによれば、このキャンペーンは、1955 年、MTS シェーネベック（北）の青年ブリガーデ班の呼びかけにはじまるとされる。新農法適用による単収増加、社会主義競争、労働単位を基礎とする生産費計算とその引き下げなど、効率化と増産を目指す項目とともに、MTS 作業におけるブリガーデ方式の完全実施、MTS 員と LPG 員の能力向上、MTS と LPG の共同作業計画が「呼びかけ」の具体的な内容をなしていた(117)。またクレムも、このキャンペーンを通して、MTS ブリガーデが LPG の指揮下に入ることが強調されることとなったとしている(118)。ヴィレの記述もクレムの記述も当時の公式見解に沿ったものであるが、ここからは LPG 傾斜を伴いつつ、事実上、MTS ブリガーデを単位とする MTS の分割化によって村・LPG との調整問題の解決が図られようとしたことが読み取れる。その後、集団化運動の再開をうけて MTS を再定義することになる 1958 年 1 月の第 2 回 MTS 会議においては、トラクター班を LPG 組合長の管轄下におくこと、コンバインは大規模 LPG にのみ投入することなどが、4000 人の MTS 農業技師・畜産技師の LPG 派遣方針とともに決定される(119)。この路線の延長線上に MTS の LPG 吸収がなされていくことになる。

ところで、MTS の分割化という点で注目すべきは、1954 年頃からブリガーデ支所の設立がなされていくことである。MTS 労働組織自体は、すでに MAS 時代からブリガーデを単位に編成されている。たとえば MTS レーリクの場合、1953 年 1 月時点で、それぞれ隣接する 3 ～ 5 集落を担当する形で計 6 つのブリガーデがおかれている。担当面積は、トラックによる運搬業務を兼務する第 6 班を別として、各班 1,100 ～ 1,500ha の範囲内にあるから、担当集落の数の違いは集落規模の差によるとみなしてよい(120)。

1954 年以降にみられる変化は、こうしたもともとのブリガーデ単位を基礎としつつも、それをブリガーデ支所として徐々に実質化していく点にある。たとえば 1955 年の MTS レーリクをみるとブリガーデ数自体は 6 班と変わらず、また、各班の担当村落エリアも一部をのぞき変更されていない(121)。変わったのは、各ブリガーデが担当するエリアの中核的村落に支所が設置され、ここにトラクター運転手のみならず、ブリガーデ修理工やブリガーデ経理までが配置されるようになったということである。農業技師も、先に述べた MTS イエーネヴィッツ第 8 ブリガーデ管轄区域にある LPG の農作業計画作成に没頭したエーメや、ブリガーデ支所のある集落に自宅を建てたテーネルトの事例からみて、支所に常駐するに等しい状況になったと思われる。

バート・ドベラン郡においては、こうしたブリガーデ支所の設置は 1954 年から開始されている。たとえば MTS レーリクでは 1954 年 3 月 4 日党指導部会議で、ケルヒョー村とメ

ヘルスドルフ村の支所設立と、その賃貸契約に関する報告がなされ(122)、その後10月の文書で支所の部屋のしつらえはほぼ終えたと述べられている(123)。MTS イエーネヴィツにおいても同年5月にシュテフェンスハーゲン村とラベンスホルスト村の支所設立に関する報告がみられる(124)。シュテフェンスハーゲン村では用地を確保して支所を新築、1年後の1955年5月報告では、支所にはトラクター運転手に二部屋が与えられているが、「部屋にはスローガンが掲げられていない。トラクター運転手の睡眠用には板が3枚並べてあるだけだ」、などと部屋の整備が不十分であることが指摘されている(125)。またラベンスホルスト村についてはユースホステルの転用により支所を設置することとするが、そのためは郡党指導部がここに居住する通勤工業労働者の住宅問題を解決しなくてはならないとしている(126)。

MTS ラーデガストにおいては、1954年4月2日付報告でハンストルフにのみ二週間前に支所が設置されたとあり(127)、さらに同年8月25日付のMTS所長ロッゲによる郡党指導部宛文書においては、当該管区の4村で新たに支所設置が可能であると書かれている。具体的には、ラインスハーゲン村では集落農業経営の建物を利用、ガーズハーゲン村ではトラクター車庫の確保はできるが運転手住宅の調達が困難、ハイリゲンハーゲン村では村当局がトラクター運転手の部屋を確保、レーデランク村はトラクター車庫を見つけることが困難であることを指摘、最後に「郡からの連絡では、来年はブリガーデ支所に予算がつくという」が、その予算の使用については未定であるとしている(128)。

全体として支所が1955年から本格稼働したこと、支所設置には車庫の確保と、なにより運転手の居住空間の調達が鍵となっていること、そしてスローガン掲示にあるように、支所が村内における政治宣伝の拠点として位置づけられていることがわかろう。最後の点については、1954年3月4日MTS イエーネヴィツの党会議において、郡党指導部のゼンクピールが、各支所のトラクター運転手の政治的対処のために政治課指導員一人を割り当てると述べていることも、後に述べることとの関連から併せて指摘しておきたい(129)。

1956年以降も、MTS支所の実質化とLPG傾斜が徐々に進行する。同年1月、郡MTS指導者・党書記長会議の席上、MTS レーリク所長クレンツは「LPG加盟を希望するトラクター運転手、および機械はすでに配分した」と発言(130)。また同年11月のMTSイエーネヴィツ党員集会においては、MTSがLPG機械の修理責任を負うこと、そのために各ブリガーデにおいて機械を支所で修理すること、また「引き取り委員会」を組織し10日ごとに支所を回るとしており(131)、支所を通した機械の修理の制度化が図られていることがわかる。1958年ともなれば、トラクター運転手がLPG集会に同席していることが確認できる(132)。

このように資本装備がある程度進んだ1954年以降、各MTSは、経営の中枢機能を担う管理部門や修理部門を別として、支所の実質化という形でMTS分割がはかられていく。ただし、そのことは、即座にMTSと農民・LPGの調整問題が制度改革によって解決されることを意味するわけではない。

第一にMTS従事者において支所への異動に対する反発がみられる。たとえば1955年7月、

MTS レーリクの機械工シュタンゲは、MTS 作業場の職が他の工員で占められ自分がブリガーデ機械工に配属されたことに対して冷遇と受け止めている。シュタンゲは長期にわたって党指導部員であり MTS 政治カードルといっていい人物であるが、修理所技術指導者との折り合いが悪く、さらにこれに絡んでコンバイン運転手となることを拒否したために、いわば制裁措置としてブリガーデ工に回された節がある(133)。同じく同年 3 月の党事業報告では、MTS レーリクの上級簿記係が、簿記の人員をブリガーデ経理にあてることを拒否したことにより大きな対立が生まれたと述べられている(134)。

しかし第二に、ブリガーデと村・LPG の対立は、ブリガーデの成績不良問題として発現している。その典型は MTS レーリクの第三ブリガーデ問題である。第三ブリガーデはブリガーデ長が機械工出身のメルヒゼデヒ、同機械工が上記のシュタンゲというブリガーデであるが、1955 年 7 月から 9 月にかけて各種の党会議の場で、3 班の成績がふるわないことが大きな問題となった。8 月 15 日には、8 月前半期の収穫作業（穀物刈り取りと思われる）について、所長から「第 3 班の一人あたりの成績が低い。日曜日のブリガーデ全体の達成面積がたったの 8.6ha である。第 5 班はボルコヴィチュ同志一人だけで 8ha をこなしている。…ブリガーデ長メルヒゼデヒ同志と機械工シュタンゲ同志の仕事ぶりが劣悪であるといわざるをえない」と指弾される。「日曜日に 70 馬力のマシンでたった 0.75ha しか仕事をしなかったのはなぜなのか」と問われたブリガーデ長は「全員が午後二時までしか働かなかったから」と答えている。翌 9 月になっても改善はみられず、9 月 27 日党指導部会議では、農作業の達成度が 52.5% に対し、第 3 班だけが 45％と他班に比べ約 1 割も低いことが指摘。収穫が終わった 11 月 28 日の党会議ではこの問題が大きく取り上げられ、ブリガーデ長のメルヒゼデヒと所長クレンツが激しく対立し、党役員選挙においてメルヒゼデヒがクレンツ同志の独裁的なやり方に反対し、指導部委員を辞退するという事態に至っている。メルヒゼデヒが指導部に返り咲くのは 1958 年 3 月であるから、和解までに実に 3 年間を要していることになる(135)。

興味深いのが第 3 ブリガーデ成績不良の原因に関する議論である。党会議の場ではそれぞれの政治的思惑を反映してさまざまな理由があげられているが、注目すべきは、責める側が、主としてブリガーデ長メルヒゼデヒのトラクター運転手労務管理能力を問題にするのに対して、守勢に回るメルヒゼデヒが、基本的に LPG の対応に原因があるとして責任転嫁をはかっている点である。「ガースドルフ村とヴィシュエア村の LPG との共同作業は、LPG 組合長の態度のためにとても難し」く、さらに「LPG は 10 日間も、特定運転手付きでトラクターをかかえこんでいる、そのように割り当てられている」と、メルヒゼデヒは LPG によって第三ブリガーデの機動性が阻害されていると主張している。他方、彼の責任を追及する側も、ブリガーデ長が村長や村の MTS 担当者との対話を十分しないままに作業をしたとの批判を展開している。この議論の構図からは、第一にブリガーデ支所の制度化にあたって末端の現場責任者としてのブリガーデ長の重さが非常に意識されていること、第二に MTS

と村・LPG の対立を背景に、両者の労働組織上の調整問題が依然として桎梏となっていたことが浮かび上がってこよう。1956 年 2 月の党活動者会議議事録では調整のために常設作業部会が設置されたと書かれているが、その効果については不明である[136]。ちなみにブリガーデ長の指導力･能力不足は､MTS イエーネヴィツでも 1957 年に第 4 ブリガーデ長パソーの問題として顕在化している[137]。

その他にも、MTS と村・LPG の労働組織の調整困難は、個人農の MTS 不信という形でくすぶり続けている。1956 年 11 月、バート・ドベラン市域の農民たちが MTS の契約不履行のせいでもはや MTS を信頼せず自らの連畜による作業に戻っているといい[138]、1958 年 10 月のアルト・カーリン村では、ある「勤労農民」が「MTS とトウモロコシ収穫の契約を結んだが、MTS はこの契約を守らなかった。これで選挙でなすべきことを知った」と捨て台詞をはき[139]、さらに同年 11 月の報告おいては､「農業課については苦情の 10 件が MTS の仕事ぶりに関わるもので、MTS が勤労農民との契約を遵守しないというものだった」[140]と書かれているのである。1958 年 7 月には農民のみならず LPG からも、MTS の労働組織が劣悪で機械作業が進まず、LPG の作業量が増加したと批判されている[141]。

1950 年代前半の資本装備の進展を考えるとき、また村や LPG との調整問題こそが労働組織上のネックであればこそ、1950 年中葉以降の MTS 分割という路線には、ある程度の合理性があったことは間違いない。また MTS の機能不全といっても、作業ごとの分析で述べたように、それがすべての領域についてあてはまることではなかったことも重要である。しかし、ブリガーデ支所の実質化は、末端の現場責任者としてのブリガーデ長の人材不足と能力問題を顕在化させこそすれ、潜在的な MTS と村・LPG の対立に根ざす労働編成の困難さを克服しうるものではなかった。ここに大型機械をテコとする農業生産力の再編成を通しての村落統合や LPG 強化路線の経済的な限界があったといえよう。と同時に、MTS 支所が実は機械サービスだけでなく、村内の政治的な拠点として位置づけられた点が見逃されてはならない。そうした村外からの党政治の一端を担ったのが MTS 政治課指導員たちであったのである。

6．MTS 政治課指導員と全面的集団化

（1）政治課指導員による村落監視と介入

① MTS 政治課指導員から管区郡党指導部指導員へ

MTS 政治課は、先述のように 1952 年 7 月第 2 回協議会の集団化宣言をうけ、農村の「社会主義化」を担う機関として MAS の MTS 転化と同時に設置された。その課題は、MTS 党組織とカードル管理､MTS 管区村落･LPG の党組織に対する指導である。MTS 政治課は、ふつう政治課指導者､同副指導者､婦人組織担当者､青年運動担当の 4 名から構成されており、

このうち副指導者は国家保安部協力者の活動にも従事していた。その後、「6月事件」を経て、1955年1月6日の閣議決定では、郡評議会によりMTSに全権委任ないし指導員がおかれ各指導員が2－3のLPGを担当することとなり(142)、さらに同年12月の政治局決定では、MTSに派遣された郡党指導部書記の指導のもとに、各MTS支所に指導員が配置されることになったといわれる(143)。これらの政治課指導員をめぐる再編が、上述のMTSのブリガーデ支所の設立と対応した動きであることは容易に推測できよう。制度的には指導員をMTS経営から分離し、彼らを末端村落にいっそう密着させる一方で、より直接的に郡党指導部の管轄下におくねらいをもったものと解釈できる。

バート・ドベラン郡においても、全国的な組織改革に連動する形で、1955年4月に政治課指導員の大幅な人事異動が実施されている。これまでの記述を繰り返すことになるが、MTS イエーネヴィッツについては、1955年にプラーゲマンがMTS レーリクから横滑りの形で政治課指導者となり、以後、MTS イエーネヴィッツにおいてMTS所長を凌ぐ影響力を行使している。その際に若手農業技師補佐出身のパプストがプラーゲマンに随伴する形で政治課副指導者となっていることも先にみた通りであるが、彼はその後1957年にはMTS レーリクに戻り管区指導員として全面的集団化工作に従事している。またプラーゲマンなきあとのMTS レーリクの政治課指導者にはヴィックが昇進するが、その失脚後の1956年以後は郡党指導部のゼンクピール―1960年には郡党第二書記である―がMTS党指導部会議に恒常的に出席するようになり強力な政治力を行使している。おそらく彼が当該MTSと管区指導員を束ねる中心的な役割を担ったと思われる(144)。管区指導員としてはアウグスティンとクレプスの名前が確認できる。アウグスティンについては先述のとおりだが、クレプスは1936年生まれの若手MTS機械工であった人物であり、1955年に政治課指導員、1957年にはツヴェードルフ村支所の管区指導員となっている(145)。

MTS ラーヴェンスベルクでは、1955年にタイヒラーに代わってヴォルファイルが政治課指導者になっている。彼は1921年生まれで、MTSブリガーデ長だった人物であるから、これも内部昇進といってよいであろう。1957年秋には管区指導員としてラコー村の集団化工作班の中心人物として村に入っている。また自らが在住するクラウスドルフ村においては、村在住の郡党指導部メンバーとして村の党活動を活性化させたとある。ちなみにこの村のLPGは「MTS農業技師ビリゼマイスター同志の力で飛躍的発展した」という。いずれにせよヴォルファイルは政治課指導者として、そして1956年以降は管区指導員として、集団化の時期において当該MTS管区の有力政治カードルであり続けたと思われる(146)。

MTS ラーヴェンスベルクには1955年時点で、ヴォルファイルの他に3名の政治課指導員がいるが、これがすべて女性である。副指導者は1931年の生まれのポガンスキーである。彼女はすでに1952年よりこの職にあり、それ以前は「政治協力員」に従事していたとある。彼女は出生地と居住地からおそらくキルヒムルソー村の有力難民新農民オットーの娘であり、1950年にピオニール指導者学校および郡党学校を終えたという。つまり彼女は難民新

農民出自の早世の若手女性の党カードルだったわけだが、同時にかなり長期にわたって郡国家保安部につながっていた可能性のある人物であった[147]。残る二人は、1953 年 8 月から婦人指導員となったヴェステンドルフ（1912 年生）と、1954 年から政治課指導員の職にあったとされるハーマン（1936 年生）だが、いずれも以前は農業に従事していたとある[148]。

以上のように本郡では 1955 年 4 月にほぼ大幅な人事異動が行われているが、基本は郡内エリア異動、内部昇進、ないしは事実上の継続であり、その限りではカードル人事上の断絶を語ることはできない。プラーゲマンは MTS イエーネヴィッツ管区指導員グループを束ねる郡党書記であり、1959 年 9 月には MTS の会議に出席し相変わらずの影響力を発揮しており[149]、また全面的集団化後の 1960 年 3 月には管区郡党書記として「政治構造計画書」を作成している[150]。彼がトップ・カードルとして当該管区の集団化に深く関与していたことは間違いない。また、彼の腹心であったゾヴァルトとパプストは、上に述べたようにそれぞれ MTS ラーデガストおよび MTS レーリクの管区指導員グループ郡党書記として各管区の集団化工作の計画書を作成している。ヴォルファイルについても上記の通りである。また、1955 年 3 月以後、バート・ドベラン郡でも各 MTS 管区派遣全権代理人の会議が行われているが―とくに夏場の農繁期はその開催は頻繁である―、議事録が確認できる 1956 年まで、彼ら政治課正副指導者や各 MTS 所長たちが、全権代理人以上に前面にでて議論を行っている[151]。

1956 年以降の情報が不十分なので正確なことはいえないし、1950 年代後半は指導員増加に伴い外部からの政治カードル登用がかなりあったことも事実である[152]。しかしここでは、全体として政治課指導員たちが MTS 内から輩出されていること、また MTS ラーヴェンスベルクの女性指導員たちが農村出自であることにみられるように、農村の政治カードルたちが想像以上に在地世界の人脈につながっている人々であったことを強調しておきたい。その意味では LPG 化の進展に伴ってみられる「村外カードル」の入村という事象は、必ずしも見知らぬ「郡外カードル」の入村を意味するわけではないというべきかもしれない。ただし、あくまで MTS を通してのカードル化であるという点で、彼らは、農民的世界に直接的に帰属する人々ではなかったことは改めて指摘しておかねばならない。

②活動実態

では政治課指導員たちはどのような活動をしていたのだろうか。彼らの任務は MTS 経営組織に対する政治的指導・管理、および管区内の各村落・LPG の政治活動に対する指導・管理からなる。MTS レーリクについては 1953 年 2 月 9 日から 14 日までちょうど 1 週間分の正副政治課指導員―プラーゲマンとランゲ―のスケジュールを記したメモが残っている[153]。これをみると二人とも週 3 日ほど村に入っていることがわかる。残りの日は MTS 内で報告書作成や会議運営などに従事していたことになろう。各村落に入った場合の活動は、1950 年代中葉であれば、集落農業経営の LPG 化の活動、村長らの村有力者との協議や情報

収集、村やLPGの党基礎組織の活性化、各種党会議の開催指導などであり、さらに婦人指導員は村婦人委員会の立ち上げ、青年指導員は自由ドイツ青年同盟の活動強化に取り組むことになる。

興味深いのは政治カードルの入村が関係者の目にはおざなりと見えていたという点である。たとえば1954年の報告では、トラクター運転手が「郡および県の活動家たちは自動車で村にやってくる。彼らは家の前は車で素通りして、村長とLPG組合長のもとを訪れ、そこで作業の状態をいろいろ尋ねると、すぐに村を立ち去る。これは正しくない。彼らは野良に来て我々と話をすべきである」と述べたとされる(154)。この批判対象に政治課指導員が含まれているかどうかは不明だが―指導員の移動は自動車の場合とバイクの場合がある(155)―、指導員の情報源が主としてLPGや村党有力者であることや、とくに1950年代前半はMTS内部の不安定さが顕著だったことを考えれば、この指摘はある程度まで当てはまることと思われる。

政治指導員たちは、村においてはSEDを代弁する存在として登場し、かつそうしたものとして認知されている。たとえば1954年、グラスハーゲン村の村議会の場で、住宅不足に絡んで「文化の部屋」が議論となったさい、MTSイエーネヴィツの女性指導員ペータースが、LPGがあるから村に「文化の部屋」が設置されると口を挟んだところ、ウプレガー婦人が「LPGより他の人の方がましだ」と反発、これに対してペータースが激しい口論で反論を展開している(156)。この事例は対立が露わになったものだが、たとえば1954年8月にはレーデリヒ村での婦人委員会の立ち上げにさいして、これに内心反発する集落農業経営ブリガーデ長が、「ペータース女史には、婦人委員会よりもトラクター運転手の仕事についてもっと気を遣ってもらいたいね」と皮肉ったり(157)、1954年9月、ラインスハーゲン村において政治課指導者タウガーベックが脱穀と供出に関して村長と協議したさい、10月中の供出達成は不可能と主張する村長から「お前さんがフォークを手に刺されるんなら、事態は改善されるだろうがね」とのあてつけをされたりと(158)、個々の交渉の場においては政治課指導員たちは非難や反発の矢面に立たされている。

このことの裏返しでもあるが、他方で彼らはLPG絡みの紛争についてはその解決の責任を請け負うべき人々ともみなされている。1954年4月のLPGにおける春耕作業時、交代制のせいで昼食をとることができないトラクター運転手たちは、LPGとの交渉を求めて―MTS経営指導部ではなく―政治課に支援を要請したという(159)。また、同年3月のMTS党員集会では、LPG組合員の交代運転手が個人農経営における作業を拒否したことに関して上記指導員ペータースがこのLPGを説得することとなっている(160)。翌1955年には、グラスハーゲン村においてペータースと全権代理人ザースが、LPG組合長が村県会議員ニーマンをスパイ呼ばわりした問題の処理にあたっている(161)。このように指導員は最前線の政治アクティヴとして末端での調整機能を期待されていたのである。

最も視覚的な各村落に対するMTS党組織の政治活動として忘れてはならないのが農村

アジテーション活動、あるいは「農村の日曜日 Landessonntag」である。1954 年 1 月最初の党指導部会議において、MTS イエーネヴィツの党指導部はこの年の最初の農村アジテーション活動を 1 月 16 日午後に行うこと、また今後、毎月第一土曜日または日曜日に農村アジテーションを行うこととしている。3 つのグループに分かれて 3 つの新農民集落に入ることになっているが、その参加予定者の名前を見ると、主として政治課指導員と党指導部委員などの中核的党活動家のグループ、MTS 経営指導者グループ、そしてブリガーデ長の小グループからなっており、MTS 内の集団編成を反映するかたちとなっている(162)。また MTS レーリクでも同じ 1954 年にガースドルフ村に対して「農村の日曜日」が実施されている。参加者は MTS 党指導部を中心に党員 5 名で、「党員は二つのグループに分かれて行動し」、村の党員新農民および LPG 農民計 8 名と話をしている。しかし、農民の反応に関する報告を見る限り、LPG 加盟問題が論じられてはいるものの主たる論点とはいえず、その実態は、村の党員に対する思想的な引き締めを狙った党内組織活動にすぎない(163)。翌 1955 年については、6 月 12 日に MTS ラーデガストにおいて「農村の日曜日」が実施されている。しかし、MTS 党指導部が党員全員に文書にて各村での議論に参加するようよびかけたものの、参加したのは要請を受けた党員のうち 3 分の 1 だけで成功というにはほど遠い状況である(164)。さらに第 33 回中央委員会総会直前のものとしては、1957 年 5 月に実施された「農村の日曜日」が注目される。「全部で 19 村落、4 つの LPG、2 つの国営農場に対して 405 人の扇動家が投入」され、加えて「サッカークラブ 5 チーム、卓球クラブ 1 チーム、文化合唱団 1 チーム、ハイリンゲンダムの楽隊、ハーモニカトリオ、海軍、低地ドイツ劇団ドベラン、ダンス・クラブなどが参加した」とあり、内容がイベント化してしまっている様子が読み取れる(165)。また、規模や内容からみて明らかに郡主導であり、MTS 指導部によるものとはいえない。

このように 1950 年代中葉においては MTS カードル主体の「農村の日曜日」が実施されてはいたものの、その政治的重要性は高いとはいえない。しかし、1958 年以降、農村アジテーションはその性質を変え、農業集団化運動としての側面を急速に帯びるようになる。それとともに MTS 本体は農村扇動の主体からは切り離され、管区指導員を核として、多様な農村カードルが動員されることとなる。以下、本論文のテーマである MTS 論からはやや離れることになるが、節を改め、管区指導員たちを軸とした全面的集団化期のカードルたちの集団化工作活動について論じることにしよう。

(2) MTS 管区指導員たちと農業集団化工作活動

さて、バート・ドベラン郡の全面的集団化は、第 33 回党中央委員会総会の決定を受け、1957 年 11 月から 1958 年初頭にかけ、党員新農民の切り崩し工作がなされることから開始された。その中核となったのが MTS 管区指導員たちであった。MTS イエーネヴィツでは 1957 年 10 月付けで管区党基礎組織の政治的評価に関する文書が書かれ―そこでは各村

党書記と党指導部の人事案が記載されている―[166]、これを受けてであろう、11 月 27 日に MTS 指導員グループの会議が開かれている。この会議はプラーゲマンが主導しており、また MTS 所長ゴロムベックも参加している[167]。MTS ラーヴェンスベルクおいても 11 月 14 日付で管区郡党指導部指導員グループの署名による「LPG 化工作班投入のための文書」が作成されているが[168]、こちらは行動計画ではなく活動の結果報告書となっている。

MTS レーリクにおいては、1957 年 12 月 24 日付けで、管区指導員グループにより「管区党基礎組織のイデオロギー状況評価と新指導部入れ替えの提案」と題されたマル秘文書が作成されている。ここでも各村ごとの政治状況の詳細な分析がなされ、あわせて党人事対策が記されている。たとえばブレンゴー村について、本村の「党基礎組織では指導員の支援のもとで会議が規則的に行われるようになった。第 33 回中央委員会総会の評価にさいしては数名の党員が反党的な態度をとり、わが党の方針に理解を示さなかった。とくにグレーデ、キープラ、レーンフェルトの各同志たちは絶対に LPG には加盟しないと発言し、キープラ、レーンフェルトの二人は帰ってしまった。･･･ 村党基礎組織はこれらの同志と論争し、場合によっては離党させることも必要だ。党役員改選に当たってはレーンフェルトを党指導部から外し、変わりにフィッシャーをいれることを提案する」などど書かれているのである[169]。

ここからは指導員たちがすでに恒常的に村党組織に入っていること、また党指導部人事の実質的な権限を指導員たちが掌握していることが読み取れる。他村についても似たような党人事の記述が続く。ロゴー村については「シェルリップ同志を LPG 党書記に提案する」、ルソー村については「新指導部にはライツネリッツ、アッカーマン、ヴォーヤンの 3 名を提案する。ケロットとグラッツは活動が不十分なので新指導部からは外すことにする」とあり、メシェンドルフ村に至っては「党基礎組織は ････ 活動能力がない。1958 年、LPG メシェンドルフ党基礎組織の設置に伴い、ここに統合することを提案する」と、村党組織再編が提案されている[170]。ただしどの管区の報告においても村党基礎組織に対する評価はおしなべて低く、その組織的脆弱さは否めない。末端の村党カードルの人材不足は深刻で、その限りにおいて指導員の党人事権限の発動も、村落政治に対して必ずしも決定的な重要性をもつものとはいえないことは指摘しておかねばならない[171]

さて、1958 年に入ると、党員個人農の切り崩し段階から一歩進み、一般個人農に対する集団化工作が開始される。もっとも目につくのが「農村の日曜日」の活性化である。バート･ドベラン郡では 1958 年の 1 月 12 日と 2 月 9 日に全郡で「農村の日曜日」が行われたが、それは従来のような「収穫作業支援のような活動ではなく、わが農民たちと農業の社会主義的な見通しについて話し合い、その中で生じてくる疑問に答えるため」のものとなった[172]。とくに 2 月 9 日の活動については各管区で驚くほど周到な準備がなされている。

MTS ラーデガスト管区においては、先述の管区指導員の郡書記ゾヴァルトが「2 月 9 日農村日曜日。MTS ラーデガスト管区の計画」と題する文書を作成し、各村落について詳細な工作計画をたてている[173]。そこでは全部で 9 村落（ゲマインデ）について計 14 の工作

班が編成されている。まず、各村落について、粗密はあるが、村の状況が分析され、工作目標や、工作班の編成などが記されている。たとえば旧農民村落であるハイリゲンハーゲン村についてみれば、ここには集落農業経営から設立されたⅢ型 LPG があり、その面積は 465.63ha（村総面積の 75%）であること、「勤労農民」は 1-2ha 層が 1 経営、2-5ha 層 12 経営、5-10ha 層 15 経営という構成であること、さらに農民の多くは旧農民で、とくに 4 経営が強力経営であることなどが指摘された上で、「個人農の説得にあたっては、まず特定農民屋敷地で協同経営している農民たち―厩舎・納屋を共同利用していると思われる（引用者）―に焦点を合わせる必要がある。この屋敷地の建物は LPG が絶対使うからである」と記されている。

表 8 はこの計画文書において各村のカードルとして名前があげられている人物たちを職業ごとに分類し、その人数を一覧にしてみたものである。彼らはこの日の工作活動に参加した農村カードルたちとみなしてよい。ここからは、郡内に存在するほぼすべてのジャンルの社会主義セクターや党・国家機関に従事する人々が動員されていること、しかし、第二に、その中でも MTS 従業員（農業技師を含む）、畜産技師、政治指導員など MTS 関係者の比率が高く、その数は LPG 組合員―組合長が中心である―を凌いでいることがわかろう。SED 党員の数は工作員の約半数にすぎず、動員対象者が党の範囲を大きく超えていること、逆に末端の村党員層が党書記を含め必ずしも動員されていないことも注意しておこう[174]。

その後、4 月には郡内 42 集落で「農村の日曜日」が実施される予定であるといい[175]、さらに 11 月 2 日にもすべての党基礎組織に対して「農村の日曜日」参加の指示がだされ、約 600 人の動員が予定されたが、しかし「いくつかの基礎組織はこれを軽視した」といわれている[176]。ただし、この間にも MTS レーリク管区指導員たちは、二回にわたって管区の村

表８　MTS ラーデガスト「農村の日曜日」工作班員の職業構成

（1958年2月実施。単位：人数）

		うち、SED 党員
MTS	18	9
指導員	4	4
畜産技師	3	0
LPG	13	6
国営農場	9	2
酪農場	4	1
農民流通センター	3	1
国営調達・買付機関	3	3
郡評議会	7	7
村長	8	6
村評議会	2	1
教師	11	7
その他	8	3
	93	50

注　：14村、93人の職業別の内訳。農業技師は MTS に含めて数えた。
出典：Rep.294, Nr.236, Bl.5-16 より作成。

落（ゲマインデ）ごとの政治状況に関する文書を作成している[177]。

翌 1959 年 2 月にも「農村の日曜日」が全郡で実施され、500 名規模のアジテーターが大量動員された[178]。MTS ラーヴェンスベルクからは 20 名が動員され、キルヒ・ムルソー村へ 12 名、ラーヴェンスベルク村に 6 名が投入されている。ノイカーリン村では村内から 7 名、独ソ協会郡委員会から 3 名、合計 10 名のアジテーターが動員されたが、折り悪く国営森林経営の集会が村ホテルで開催されたため、各戸訪問は 3 家族にとどまったという。さらにクレペリン市では 9 名のアジテーターが 14 家族を、アルテンハーゲン村では、ドイツ自由青年同盟員 6 名、郡党指導部 2 名、村民 5 名の計 13 名が「勤労農民」5 家族を訪問。ヴィヒマンスドルフ村では、郡党学校生徒と LPG 組合員 26 名が参加したが、旧館に住む女性難民たちが「私はここで第二の故郷を見つけた。戦争はいらない」と発言したという。ブレンゴー村には レーリク市から 7 名が入ったが、「勤労農民」たちは LPG 労働組織が劣悪であると批判、さらに MTS はトウモロコシの撫養作業の機械をもっていないと述べたと報告されている[179]。このように投入規模は村ごとにかなりのばらつきがあるようだが、全体として、村内外のカードルが動員され、各戸訪問を繰り返している様子がうかがえよう。また、MTS 所属カードルも動員対象であるが、集団化運動はいまや完全に郡主導のもとでキャンペーン化されていることも明白である。

1959 年については、ラインスハーゲン村の集団化工作班の活動計画文書がある[180]。興味深い文書なので、やや詳しく見てみよう。これによれば、当村にはⅢ型 LPG がすでに存在するため、I 型 LPG の設立も視野に入れつつ残りの個人農を LPG に組織することを獲得目標として、工作班が「少なくとも毎週一回二人で一人の勤労農民を訪問」するとされている。工作班は 11 名で編成されているが、うち LPG からは組合長や農業技師など 3 名が、MTS からは支所長や支所機械工、および所長の 3 名が、村党からは書記と指導員の 2 名が、そしてその他には村長と酪農所長など 3 名があげられている。全体の責任者は郡農民互助協会第二書記と村長とされている。

工作期間のうち、最初の 4 週間は、「勤労農民」と個人的に話し合うこととし、かつ上記のように一人の個人農に対して二人の工作班員を割り当てるとしている。工作班員は二週間後に中間報告をおこない、4 週間後に村党員集会と村農民互助協会の会議を開催する。工作班員で SED 党員であるものは、村党指導部会議および党基礎組織の会議にゲストとして必ず出席し、さらに 7 月には村評議会と村会に参加、その場で村の社会主義的改造について村評議会役員と話し合うこととしている。最後にこのアジテーションを成功させるため、工作班は事情に応じて、農民たちの具体的な数、名前、住所を記載したビラを発行することとある。

工作期間が 4 週間と一気に長くなり、工作活動も戸別訪問の形で個人農に対する圧力をかけることからはじめ、その後、村党組織の掌握から、村農民互助協会、村会などに広げていくなど、時間をかけて正当化のプロセスを段階的に踏んでいくことが想定されているとい

えようか。工作活動の密度が高まり、かつ村内カードルの動員も深化している。最後のビラは、事実上、見せしめ的な効果を狙ったものであろう。こうした活動方式は、程度の違いこそあれ、集団化の最終局面でも一般に行われていたと考えられる。1960 年 2 月 9 日付の先述のゼンクピールから郡党指導部宛極秘報告文書では、1 月期の LPG 加盟の成果について触れたあと、「国家組織やその他の制度の活動方式に大きな変化」はなく、「主たる活動は村落にて行われて」おり、そして「土日を含めて毎日すべての村で、当地の党組織と大衆団体の協力のもとで農民との対話を続けることを絶対にすべきである」と書かれている(181)。

むろんこうした強引なやり方に対しては反発が出るのも必至である。1959 年 10 月 15 日の報告では、村の党員や教師たちから「農村日曜日の大量投入は農民たちを怒らせるだけだ」との声があがっているとの記述が見られるし(182)、またイエーネヴィツ村では、「文化の家」において殴り合いの事件が発生、人民警察支援者と MTS 指導者が侮辱され、6 人が警察に拘留されるという事件も起きている(183)。だが、これらの上からの集団化圧力に対して人々がどう対応したのかについては、すでに拙稿で論じてきたとおりであるのでここでは繰り返さないこととする(184)。

(3) MTS の LPG への吸収過程

では、1950 年代の機械化を担った MTS 経営はこうした全面的集団化の進行の中で、どのように解体・再編されていくのだろうか。大型農業機械に関わる人とモノのあり方の変化という点で、それは集団化過程の重要な一側面をなすはずである。最後にこの点についてみておこう。

さて、MTS の実質的な分割化が進行するなか、先述のように 1958 年 1 月の第 2 回 MTS 中央会議において各 MTS 支所が LPG の指揮下に入ることとされたのち、1959 年 2 月の第 6 回 LPG 会議において、村農地の 8 割をこえた LPG は貸与の形で MTS 機械を引き受け、かつトラクター運転手が LPG 組合員となることが決定される。これをうけ 4 月 9 日には同内容の省令が発布されるにいたった。これが MTS の最終的な解体を決定づけることになったといわれている。その後、全面的集団化完了 2 年後の 1962 年 6 月には、農業機械の LPG への売却が決定、他方で従来の MTS は修理機能に特化される「機械修理ステーション」に改組されることになった(185)。これをもって MTS 農業機械の再編の完了とみなしていいだろう。1952 年の MTS 化以降、MTS の LPG 傾斜は鮮明だったとはいえ、1950 年代は、限定的とはいえ優良新農民集落の形成にみられるように、土地改革に基づく国家主義的な新農民体制がなお機能していた時期であった。MTS はその「新農民体制」を支える重要な制度であったから、MTS の消滅は戦後東ドイツの土地改革体制の終焉でもあったことになる。

とはいえ、その消滅はそれほど簡単に進行したわけではない。ロストク県では 1959 年 9 月末日時点で LPG89 経営が、翌 10 月末日時点で LPG129 経営が大型機械を引き受けている(186)。さらに県農業課 LPG 掛文書は、各郡農業課からの報告をもとに、1959 年中に

LPG133 経営が、1960 年初頭に LPG55 経営が MTS 大型機械を引き受ける予定であり、さらに 1960 年の春耕時までに 20 の MTS がすべての機械を移行するとしている(187)。ロストク県の MTS 総数は 1956 年時点で 52 経営とされるので(188)、1960 年においては全体の 4 割程度の移行完了を見込んでいたこととなり、進捗度合いは意外に遅いといえる。全東ドイツについても、とくに南部諸郡では村面積や LPG が狭小なため MTS 機械の LPG 移行が難しいことが指摘されている(189)。拙稿で論じてきたように、MTS をまるごと吸収しうるだけの大規模 LPG はいうまでもなく限定的であり、また集団化のありようは多様であったことを考えれば、MTS 吸収が簡単な話ではないのは当然ともいえる。

バート・ドベラン郡でも MTS の LPG 吸収に対する個人農や LPG の反応は複雑であった。一方では、従来耕起作業を MTS に依存してきた新農民層において、MTS 解散のため LPG 設立により機械保有することが必要であるとする発言がなされている(190)。またトラクター委譲を歓迎する LPG もあり(191)、その限りでは MTS 解散は、MTS 依存を前提に経営戦略を組んでいた畜産農民にとって打撃であり、LPG 化の促進要因となったことは否定できないと思われる。Ⅲ型 LPG から機械貸与を受けることになる I 型 LPG の不満も同じ文脈で考えることができよう(192)。ただし、機械が故障したままの委譲であったために事実上稼働し得ない場合があったことなど(193)、LPG 側の不満もみられるが。

しかし、反発が顕著だったのはこうした LPG 側よりも、むしろ職場異動を余儀なくされる MTS 従業員の方であった。

バート・ドベラン郡については、断片的ではあるが、MTS レーリクの解散に関する事情が判明する。ちょうど上記の MTS 機械委譲の閣議決定直後の 1959 年 4 月 14 日、MTS 経営党の年次大会が開催されており、その議事録が残っている(194)。それによれば、郡の立場を代表するボルバミン―指導員と思われるが身分は不明―が、集団化の意義を強調したのち、「MTS の解散については、とくに悩むようなことではなく、これ以上は何も変わらない。せいぜい何人かの職員が異動となるが、その他はこれまで通りである。この政策を通じて実現したいのは個人農がまとまって LPG に加盟することである。すでに 4 つの大規模 LPG があり、それが他の MTS に指導されるなら、MTS レーリクはもはや必要ではなくなる。とはいえ修理所は残り、むしろ拡張することとなろう」と説得を試みている。これに対し党員からは「なぜ MTS の変更に関して党員たちに何の説明もなかったのか」との批判がなされ、急な解散話に対する驚きと怒りの念が表明されている。これに対してボルバミンは「この件について話さなかったのは、これが議論しうることではないからだ。いかなる MTS 員にも関係ない。党指導部がもっと情報を与えるべきだというのはその通りだろう。しかし活動報告を聞けば分かる話だ」と高圧的に対応。MTS 所長クレンツも、「昨年の郡代表者会議において、1960 年以降、MTS レーリクを解散することが提案され」、その方向で議論が進められてきたこと、その議論の結果、「四つの大規模 LPG が設立されることになった。だからここでは MTS はもはや不要」となったと述べ、所長自ら MTS 解体に同意を与えている。

さらに2ヶ月後の6月6日のMTS党会議では、所長クレンツが、「第6回LPG会議の決議に基づき、大型機械をLPGレーリクに引き渡す。･･･祝祭的な貸与契約署名儀式とMTSレーリクのうち10名がLPGに受け入れられること、これらがLPG農民との同盟関係をより密接なものにすることになろう」と発言している(195)。

MTSレーリク管区は郡内でも村落の範囲をこえた大規模LPGが早期に設立されていく地域であり、そのため上記の発言にみられるようにMTS機械のLPG吸収が比較的容易であったと考えられる。実際、MTSレーリクは二つに分割され、それぞれ隣接管区のMTSイエーネヴィツとMTSラーヴェンスベルクに統合されることになった。しかし、上の議論からは、MTS党員にとってすらこの再編話が突然であり、彼らが困惑したことを示している。一部を除き日常業務に大きな変化はないと強調するボルバミンの説得の仕方には、運転手たちの不安を押さえようとする意図が透けて見えるともいってよい。

MTSのLPG吸収に対する運転手の反発は、彼らのLPG加盟拒否および転職となって現れた。先にあげた1959年10月のロストク県農業課LPG掛文書によれば「トラクター運転手827人、ブリガーデ長72人、ブリガーデ機械工91名、ブリガーデ帳簿係53人がLPG組合員となった。…（しかし―引用者）トラクター運転手102人、ブリガーデ長8人、機械工6名、ブリガーデ帳簿係18人はLPG組合員にはならなかった」としている(196)。これによれば総計1034人のうちLPG加盟拒否が134名であるから、その比率は11.8%となる。同時期における全東ドイツについてはMTS従業者10,480人のうち加盟しなかったのは1104人、つまり9.5%であるから(197)、ロストク県は高い方に属するといえる(198)。1960年8月、ディートリヒスハーゲン村のLPG農婦シュコフスキーは、ある党アクティブとの会話の中で、「LPGは仕事が多く稼ぎが少ないのです。･･･LPGの仕事のほとんどは老人たちがしています。若者たちは農業に従事せず、みな都市に行ってお金を稼ぎます」と述べたという(199)。LPG加盟を拒否する運転手たちも、またこうした農村青年の脱農傾向を共有していたのであろう。

トラクター運転手のLPG加盟と定着をはかるためにLPGの側もさまざまな懐柔策を試みた。全東ドイツに関する同時期の農林省文書では、トラクター運転手をLPG組合員ではなく事実上「専門労働者」として処遇するためのさまざまな措置が各LPGでとられていることが述べられている。たとえば、従来のMTSの稼ぎを基準にして、そこから労働単位数を逆算したり、運転手が住宅付属経営を希望する場合、運転手の牛をLPGが飼育するとしたり（飼育担当者は報酬として1頭あたり90～105DMを現物の乳量で得る）、さらにより端的には、トラクター運転手、ブリガーデ長、機械工に特別手当が支払われている例があげられている。これは賃金保証だが、労働形態においても、機械はLPGの自己管理に移行されたものの投入形態はMTS時代と変わっておらず、LPGの中で「トラクター運転手ブリガーデが独立したブリガーデとなっている。このためにLPGに機械を委譲したことの基本的な意義がLPGによって利用されていない。LPG機械投入の指導の第一の問題はLPG

指導部カードルの能力にある」と述べられており、LPG 指導部に機械管理能力がないため、運転手の労働実態が MTS 時代と変化がないことが述べられているのである[200]。その意味では MTS レーリクの解散時になされた「労働実態に変化なし」という説明は、あながち嘘であったわけではないのである。

もっとも他方で LPG 組合員の側も、運転手の LPG 加盟を妨害または侮辱したり[201]、「交代運転手」賃金が正規運転手の賃金に比べ低いことに不満を表明したりということが見られる点からみて[202]、MTS のトラクター運転手に対する対立感情が払拭されていたわけではない。こうして 1950 年代の MTS と村・LPG の対立は、一部トラクター運転手の農村離脱を生みつつ、全面的集団化後の LPG に未解決のまま内包されていったことが読み取れるのである。

7．おわりに

個人農と LPG が併存した 1950 年代の東独農村において、MTS は機械サービスの提供者にとどまらず、東独社会主義政権の政治的・経済的拠点であった。本稿は、かつてのような MTS 機械化を賞賛する公式見解はもとより、逆に MTS の機能不全を強調してこれを過小評価する立場をも批判する観点から、MTS を媒介とした新たな農村カードルの社会的形成、MTS を通しての村の農業機械化のありよう、MTS 政治課指導員の村落政治支配と集団化に対する関わり方などを分析することを通して、MTS の歴史的な意義を全体として明らかにすることを目的とした。総じていえば、同じく戦後東独農業の「大規模農業化＝脱農民化」過程といっても、村落の内側からみた場合に描かれるであろうような集団化過程とは異なる側面が、以上の MTS の分析からは浮かび上がってきたと思われる。

第一に、MTS は新たな農村カードル形成の装置であった。MTS は、基本的に政治カードル、農業テクノクラート、工業労働者（機械整備部門）、トラクター運転手の 4 層からなっていたといってよい。このうち MTS 所長や政治課指導者などのトップ・カードルは郡党指導部に直結しており、MTS イエーネヴィツにみたように、1950 年代初頭の不安定な時期においては彼らを軸に MTS 内の権力闘争が展開されている。注目すべきは農業技師である。一方でとくに若手農業技師補佐として MTS に採用された者たちは、有力な政治カードルの供給源ともなり、MTS 党書記を経て政治課指導員に上昇するキャリアを歩む。他方で―こちらの方が一般的だが―1950 年代後半には、戦後の新農業教育制度を経て MTS 農業技師となった者が登場し、彼らの多くは、1957 年以降に LPG 組合長など LPG 幹部に転身していく。その意味では彼らこそがその後の SED 農村支配を農業の現場で担う人々とであったといえよう。ただし、彼らには技術官僚としての自負心がみられ、その点で労働者出自の政治カードルとは異なる行動様式を保持している。なお、以上の農村カードルの世界は、単なる受益

だけで語りえるものではなく、「性モラル」や「アルコール問題」を契機とした「自己批判」や「相互批判」による規律化が政治的思惑を持って常にイデオロギッシュに語られるような過酷な世界―スターリニズムの政治世界―に彼らが生きることを余儀なくされたことを意味することも看過されてはならない。能力不足による不本意なポスト異動も頻繁である。

これに対して MTS 農業労働の現場を担ったトラクター運転手は、その数の多さの割には政治カードル化のキャリアをたどった人々が相対的に少ないグループであった。彼らは工業労働者グループ―SED 党員比率が高い―とは異なって、むしろ戦後農村青年層に重なる人々であり、このために流動性が高く「共和国逃亡」もかなりみられる。しかし他方で MTS 世界に属する以上 SED 支配を原則として受容しており、交代運転手に対する意識にみられるように労働現場においては農民的世界とは一線を画している。その意味でトラクター運転手は境界的な存在であった。それがゆえにこそ、トラクター運転手の「政治的開発」が運転能力の向上と共に強く要請されたのである。

第二に、MTS を媒介とした村の農業機械化については、まず、戦前・戦時の農業機械化の進展をふまえたうえでのものであったこと、その点でソ連モデルの移植といわれるほどには歴史的現実との乖離はなかったことは指摘しておきたい。問題は、作業部門ごとの分析から明らかになったように、MTS 農業機械化の進展度合いが作業ごとに偏倚していたということである。耕起作業においては MTS トラクターの支配率が圧倒的だが、収穫・脱穀作業では刈取り結束機・脱穀機と労働力の組織化において村主導による調整がなされている。しかし根菜類に関しては MTS の貢献度が極端に低く村主導の調整も不可能であり、このことが LPG 経営に対して大きなストレスを与えることになった。これに対して畜産主体の個人農は MTS 利用を穀作部門に限定することで、むしろ上手に MTS 機械サービスを利用していたといえる。このように MTS 機械化は優良新農民の形成と LPG の経営困難を同時に増幅させる側面があったのである。優良新農民が LPG 加盟を拒否する所以である。

MTS 支所設立から、全面的集団化期における MTS の LPG 吸収へと至る過程は、上記のような MTS と村の調整問題を、トラクター保有の LPG 一元化により解決していくことを狙いとした。MTS トラクターに依存する個人農や、トラクター配分をうけない小規模 I 型 LPG―優良新農民を主体とする―にとっては、MTS 解散がやはり打撃であったことは否定できない。ただし、トラクター運転手の LPG 加盟拒否、あるいは加盟後の彼らに対する特別措置にみられたように、MTS 時代にみられた MTS と農民の二重構造は、決して解消されたわけでなく、当面は LPG 組織の中に潜在化していったと考えられる。

第三に、MTS のもう一つの大きな特徴は政治課が設置されていたことである。MTS 指導員は MTS 経営の政治的規律化のみならず、MTS 管区内村落の政治組織化の中核的な担い手ともなった。指導員については、彼らが MTS 内から輩出されていること、また、予想以上に在地世界の人脈につながっている人々であったことが注目される。このことは彼らが必ずしも見知らぬ「郡外政治カードル」ではなかったことを意味しよう。また、確かに 1955

年～ 56 年にかけておこなわれた制度改革により MTS 政治課は廃止され政治課指導員は管区指導員となったが、しかし、実態的には政治課指導員はそのまま管区指導員であり続けていることがしばしば確認される。その点で人的連続性は明瞭であり、また管区指導員と MTS 党指導部との一体性も壊れていない。

指導員の日常的な活動が村落政治にどの程度の影響力を行使し得たかは、本稿の記述からは明言することはできないが、まず第一に、彼らは党専従活動家として各村落において党と政府を代表する存在としてふるまう一方で、末端の現場で村民の反発の矢面に立ち、また内部対立の仲裁を期待されるという側面をもっていた。しかし第二に、もっとも注目すべきは集団化工作における彼らの役割である。1957 年秋以降の集団化運動は、MTS ではなく郡党指導部主導のもとになされていくが、管区集団化工作は指導員たちの立案した計画に基づき、きわめて周到な準備のもとで、MTS カードルなど村内外の各種カードルを動員する形で実施されていくのである。東独農業の全面的集団化過程における物理的暴力の相対的な少なさは、こうした管区指導員らの周到な準備と活動による「洗練された暴力」の有効性によるところがあったといえるかもしれない。ただしこの点については、いわゆる国家保安部協力員による諜報活動の実態をもあわせて明らかにすることが必要であり、過大評価は禁物である。

最後に以上の点をふまえつつ論点を 3 つだけ提起して、本稿を終えることにしよう。

第一点は、「村内カードル」と「村外カードル」という農村カードル形成の二つの系譜の関わり方である。これまで本誌掲載の拙稿で強調してきたように、戦後東独の農業集団化のありようは集落形態に応じて多様であるが、とくに早期に全村集団化する優良 LPG や優良新農民集落については、集落の一体性が維持される形で農民自身が上からの外圧を受容しながら LPG 化を担っていく過程がみられる。こうした集落では「村外カードル」の果たす役割は小さいであろう。問題は一体性が脆弱か、もしくは壊れた集落である。こうしたところは近隣 LPG や大規模 LPG への吸収などの形で集団化がなされていくが、そうなれば本稿で論じたような「村外カードル」の役割も大きくなるであろう。では、彼らを農民たちはどのように受容するのだろうか。注目したいのは、トップ・カードルを別とすれば、彼らは完全な他所者の非農民カードルではなく、主として郡内異動の結果として他村に入るにすぎないこと、さらには、農業技師についていえば、古参農業技師が農民的出自であることはもとより、若手農業技師についても工業労働者文化には属しておらず集落への定着度が高いと思われることであろうか。こうした要素が「村外カードル」との妥協を生み出す余地を作ったのではないかと思われる。

第二点は、世代の問題である。本稿では MTS カードル形成を主として職種ごとに論じたが、実は農業技師もトラクター運転手も、中心は戦後農村青年たちである。村党組織や LPG 組合員が高齢者が多いのに対して、MTS の世界は、トップ・カードルとブリガーデ長がやや年配なのを別とすれば、そこは明らかに男女の若者の世界であり―女性は事務職に従事している―、老若の対照性は際だっている。これは土地改革や、その後の新農民経営や

1950年代のLPG設立が主として親の世代によって担われていたことを意味する。男子に限定すればだが、若者たちの選択はMTS運転手あるいは農村カードル化か、都市への流出か、さもなくば「共和国逃亡」であった。女子に関しては、指導員の女子比率が高いことが注目されよう。いずれにせよSED支配への対処は一律ではないといはいえ、その受容の仕方が、世代やジェンダーごとに異なっていたことは、戦後東ドイツ農村・農業の「近代」を考える上では重要な論点になると思われる。

第三点は、1950年代中葉という時期のもつ意義である。従来、1950年代の東独農村は集団化政策を軸に論じられてきたから、1953年の「6月事件」と58年以降の全面的集団化再開のはざまにあり、しかも国際的には非スターリン化が進捗するこの時期は、むしろ社会主義政権形成という点では停滞期として位置づけられてきた。しかし、ちょうどMTS活動のピークにあたるこの時期こそは、静かだが後につながる大きな変化が生じていた。本稿で見たように、1955年前後からMTS出自の若手農村カードルが台頭しはじめ、またMTS自身もトラクターの蓄積を背景にブリガーデ支所を設立、これに対応する形で農業技師や管区指導員が配置される。集落農業経営がLPG化されるのもちょうどこの時期に重なっている。とくにMTSブリガーデに対応して数集落をエリアとする支所設置は、MTS経営の実質的な分割化であった一方で、支所が置かれた集落に対して新たに「中核村落」という位置づけを与えたこととなった。こうして長期的にみれば1954/55年は大規模農業機械の空間拠点となる「社会主義」農業集落の出発点となった。本稿ではほとんど言及し得なかった「文化の家」をめぐる動きもそうした観点から検討してみる価値があると思われる[203]。

注

(1) Bauern Echo, Ausgabe Mecklenburg, Demokratischen Bauernpartei Deutschlands, 1952.

(2) 村田武『戦後ドイツとEUの農業政策』（筑波書房）2006年、128-132頁。なおソ連の機械トラクターステーションについては、高尾千津子『ソ連農業集団化の原点 ―ソヴェト体制とアメリカユダヤ人―』（渓流社）2006年、がある。

(3) Bauerkämper, A., Ländlichen Gesellschaft in der kommunistischen Diktatur. Zwangsmodernisierung und Tradition in Brandenburg 1945-1963, Köln 2002, bes. S.130-132 u. 311-324.

(4) Ders, Loyale „Kader" ? Neue Eliten und SED-Gesellschaftspolitik auf dem Lande von 1945 bis zu den frühen 1960er Jahren, in; Archiv für Sozialgeschichte, Nr. 39, 1999, S.265 - 298.

(5) このほかの最近の研究としては、シェルストヤノイが1950年代初頭の農政史研究においてMASの設立過程と労働組織を詳述し、またディクスが戦後入植史研究においてMTSが新農村建設計画の中核的な位置づけを占めたことを論じている。Scherstjanoi, E., SED- Agrarpolitik unter sowjetischer Kontrolle 1949-1953, München 2007, S.317-337; Dix, A., „Freies Land" Siedlungsplanung im ländlichen Raum der SBZ und frühen DDR 1945 bis 1955, Köln 2002, S.341-349. ちなみに前者はソ連ヘゲモニーが政策決定過程に与えた作用に焦点をあてた研究であり、後者は戦後入植政策をナチス期の入植学との連続性でとらえようとした研究である。

(6) Teske, R., Staatssicherheit auf dem Dorfe. Zur Überwachung der ländlichen Gesellschaft vor der

Vollkollektivierung 1952 bis 1958. BF informiert 27, Berlin 2006.

(7)　当該郡の空間的構成については拙稿（1）「戦後東独農村の全面的集団化と『勤労農民』」、『生物資源経済学研究』第 13 号（2007 年）4-6 頁を参照されたい。

(8)　主として依拠したのは下記の史料である。Vorpommerische Landesarchiv Greifswald （以下、VpLA Greifswald), Rep.294, Nr.184-198, Nr.211-215, 217-220, 222-227, 229, 231-246, 291-292.

(9)　拙稿（2）「戦後東ドイツ農業における土地改革と新農民問題」『生物資源経済学研究』第 6 号（2000 年), 17-21 頁。

(10)　VpLA Greifswald, Nr.240, Bl.37-39.

(11)　Scherstjanoi, a.a.O., S.110-112.

(12)　VpLA Greifswald, Nr.240, Bl.38.

(13)　Bauerkämper, Ländlichen Gesellschaft, S.134f.

(14)　Ebenda, S.134-139; Vgl. Schöne, J., Landwirtschaftliches Genossenschaftswesen und Agrarpolitik in der SBZ/DDR 1945-1950/51, Stuttgart 2000.

(15)　Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, DK 1, Nr. 8572, Bl.181-184.

(16)　Landeshauptarchiv Schwerin, 6.21-4, Nr.40, Personalkarten der leitenden MAS Kader A-Z.

(17)　Krombholz, K., Landmaschinenbau der DDR. Licht und Schatten, Frankfurt/M 2006,　S.32-35, u. 211; Vgl. Landeshauptarchiv Schwerin, 6.11-2, Nr.676.

(18)　ちなみに西独では 1950 年代にトラクター台数が 10 倍と飛躍的に増大している。Bauerkämper, Das Ende des Agrarmodernismus, in; Dix/Langthafer（Hg.), Grünen Revolutionen, Jahrbuch für Geschichte des ländlichen Raumes 2006, Insbruck 2006, S.154.

(19)　ちなみにテスケによれば、全東独の MTS の事業所数は約 600 と終始一定しているが、従業員は平均して経営あたり 1950 年が 40 人、1958 年が 180 人と急増したという。Teske, a.a.O.,S.14.

(20)　VpLA Greifswald, Nr.240, Bl.37.

(21)　MTS レーリクと MTS ラーヴェンスベルクについては表 3（1）（2）の脚注参照。MAS イエーネヴィッツの従業員リストについては、VpLA Greifswald, Rep. 294, Nr.232, Bl.59.

(22)　東独全体に関しては、バウアーケンパーが、1956 年の数字として、全 MTS 従事者約 103,000 人のうち約 60％が農民の息子であるとしている。Bauerkämper, Ländliche Gesellschaft, S.316.

(23)　以下、MTS イエーネヴィッツに関しては次の文書群による。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, 233, u. 234.

(24)　一般に年に 1 ～ 2 回ほど「報告･選出集会 Berichtswahlversammlung」と称される党員総会が開催される。経営党組織では最重要の会議で、ここでは年間党活動の活動報告とそれに基づく議論、そして党役員改選が行われている。

(25)　VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.43（RS）; Rep.294, Nr.246, Bl.43-44; Rep.294, Nr.280, Bl.33. なお 1955 年の当該郡の「共和国逃亡」は 1292 人（うち都市部 849 人）、対人口比で年率 2.2％（都市部 2.3%）と深刻である。農村部と都市部で大きな差はない。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.280, Bl.28.

(26)　VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.53. なおゼーガー女史については拙稿（3）「ホーエンフェルデ村の農業集団化」『経済史研究』（大阪経済大学編）第 10 号（2006 年), 156-157 頁を参照。

(27)　Teske, a.a.O., S.23-25. テスケはここで農村部秘密警察の活動の決定的な第一歩を 1953 年初頭とし、具体的にはこの MTS 政治課副指導者の国家保安部協力者化にみている。

(28)　以下、MTS レーリクに関しては次の文書群による。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242 - Nr.246.

(29)　VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.240, Bl.37-38.

(30)　ちなみに着任時の自己紹介によれば、クレンツは 1911 年、農業労働者の息子として出生。国民学校卒で、職業は塗装工という。戦時中は空軍の機械工補助で抑留経験はなし。1945 年 7 月に SED 入党。近隣郡で働いた後､1950 年までは党労働活動指導者や「政治指導員 Instrukteuer」として活動したのち、1950 年より MTS ダスコーの文化指導者、副所長を経て、同 MAS の MTS 移行に関与。1954 年に

党指導者学校に通い、修了後 MTS レーリク所長に着任することとなったという。VpLA Greifswald, Rep. Nr.244, Bl.77. 終戦直後の典型的な党政治カードルのキャリアといえようか。

（31） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.244, Bl.124. プラーゲマンの得票は 20 票中 13 票である。

（32） 以下、MTS ラーデガストについては以下の文書群による。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235-237.

（33） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.237, Bl.86.

（34） VpLA Greifswald, Rep. 294, Nr. 237, Bl.5.

（35） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.267.

（36） 性的規律が適用されたのは男だけではない。まれな事例には違いないが、1953 年 5 月、MTS レーリク政治課副指導員のランゲ女史が、既婚男性を誘惑したとして党内処分を受けている。以後、彼女は文書に登場しなくなるから、これを契機にプラーゲマンによって事実上排除されたと思われる。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.244, Bl.41f.

（37） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.149- 150, 178, u. 191.

（38） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.218.

（39） 1953 年 2 月、MTS レーリク党員集会に出席した郡党指導部リンデマンが会議終了後、「どうして党員はそんなに元気がないのか」と尋ねたのに対し、問われた指導部員ガーベルトは「革命的意識が乏しいからです」と答えている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242, Bl.12. トラクター運転手の発言が少ないことについては、VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.52; Rep.294, Nr.213, Bl.79 など。

（40） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.188-190.

（41） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.244, Bl.55-56.

（42） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.240, Bl.34; Rep.294, Nr.242, Bl.102; Rep.294, Nr.245, Bl.46, u. 159.

（43） Bauerkämper, Loyale „Kader"?, S.287.

（44） クレム（編）『ドイツ農業史』（大月書店）1980 年、197 頁。

（45） リピンスキーに関しては次の箇所による。VpLA Greifswald, Rep.200, 4.6.1.2., Nr.207, Bl.86; Rep.294, Nr.243, Bl.23 u. 52; Rep.294, Nr.244, Bl.8, 38, u. 117; Rep.294, Nr.245, Bl.33, 89, 149, 170, 178, 192, 227, u. 235; Rep.294, Nr.246, Bl.15: なお 1957 年 5 月にはテショー村の居酒屋でリピンスキーが酩酊した農民達から「スパイ」と罵られという事件が報告されている。同姓の別人である可能性もあるが、そうでなければこれはリピンスキーといえども農民たちにとっては「奴らの世界」―MTS 党カードルの世界―に属する人間であるとみえていたことを意味しよう。ちなみにこの時農民たちは自由主義経済の導入を訴え、「西ドイツが東ドイツ農民の共和国逃亡に対してオープンでなければ、われわれは LPG に強制加入させられていただろう」と発言、また彼らのテーブルには校長、管区人民警察駐在員が酩酊状態で同席していたが、誰もリピンスキーを擁護しようとしなかったという。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.92-93.

（46） パプストとゾーバルトに関しては次の箇所による。VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.213, Bl.38; Rep.294, Nr.234, Bl.94-96, 98, u.110; Rep.294, Nr.236, Bl.239; Rep.Nr.237, Bl.51, u. 54-55（+RS）; Rep.294, Nr.242, Bl.117; Rep.294, Nr.244, Bl.2, 8, 18, 41, 57, 79, 115, u. 120; Rep.294, Nr.245, Bl.1, 11, 13f., 33, 74, u. 195; Rep.294, Nr.246, Bl.18, 24, 44, 85, 91, 112, 142, u. 169.

（47） テーネルトについてはVpLA Greifswald, Rep.294, Nr. 235, Bl.205-206; Rep.294, Nr.237, Bl. 55（+RS）, 76, 90, 113, u.136（+RS）.

（48） Der Scheinwerfer. Dorfzeitung für den MTS-Bereich Jennewitz, Juni, 1957, Jg.3, Nr.6, S.3.

（49） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.333, Bl.154.

（50） Gabler, D., Entwicklungsabschnitte der Landwirtschaft in der ehemaligen DDR, Gießen 1995, S.97.

（51） ヤーチュについては、以下を参照。前掲拙稿（3）168-171 頁。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.229, Bl.141; Rep.294, Nr.233, Bl.94, 140, u. 166. 彼は学士畜産技師 Dilpom Zootechniker で、ドイツ農民党（DBD）党員である。

（52） グローガーについては、VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.193, Bl.163; Rep.294, Nr.233, Bl.50, 144, u. 166; Rep.294, Nr.234, Bl.215-218. およびKreisarchiv Bad Doberan, Nr.1-1746, oh. Bl, d.24.01.1958, d.

02. 05. 1958, u. d. 27.05.1958. グローガーも農学士 Diplom Landwirt である。

(53) ヘルフについては VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl.139 u. 170; Rep.294, Nr.234, Bl.188, u. 217f.; Der Scheinwerfer, Mai.1957, Jg.3. Nr.5, S.2, u. Juni 1958, Jg.4, Nr.6, S.2: MTS ラーデガストでは 1954 年に上級農業技師となったプリースが―年齢不詳だがすでに 1952 年に MTS 農業技師補佐および党書記として登場している―その能力を見限られ、1955 年にザトー村集落農業経営指導者への異動を言い渡されるがこれを拒否、その後 LPG レーデランクの組合長になった事例がある。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.2, 32, 74, 118, u. 158; Rep.294, Nr.237, Bl. 22, 55, 87-89, 97（RS）, u. 136-137. なお女性農業技師たちも 1950 年代中葉以降何人か登場するが、上級農業技師や LPG 組合長になる事例は確認できなかった。

(54) ヴィックについては、VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.14, 26, 33, 53, u. 69; Rep.294, Nr.242, Bl.184; Rep.294, Nr.243, Bl.13（RS）, 22, u. 40; Rep.294, Nr.244, Bl.9-10, 57, 75, 79, 89, 103-105, 119-120, 124; Rep.294, Nr.245, Bl.2, 149, 159, 165, 176-177, 180, 192, 195, 227, u.292.

(55) アウグスティンについては VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242, Bl.182; Rep.294, Nr.244, Bl.18, 57, 67, 79, 94-95, 103-105, 120, u. 124; Rep.294, Nr.245, Bl.10, 11, 13, 35, 46, 149, 159, 169, 192, 195, 235, 246, 257, 271, 291, u. 294; Rep.294, Nr.246, Bl.6, 85, 92, 115, 120, 137, 142（RS）.

(56) タウガーベックについては VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.115-117; Rep.294, Nr.236, Bl.100; Rep.294, Nr.237, Bl.23, 90, 113, u. 136（+RS）.

(57) アルフレド・ハーンの事例である。VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.243, Bl.27（RS）; Rep.294, Nr.245, Bl.268; Rep.294, Nr.246, Bl.91.

(58) ミーカイトの事例である。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, 233-234, u. 237.

(59) VpLA Greifswald, Rep.294, Rep.294, Nr.232, Bl.59; Rep.294, Nr.242, S.166-167; Rep.294, Nr.244, Bl.30 u. 35.

(60) VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.240, S.38. ちなみに MTS ラーヴェンスベルクの従業員リストにおいて 1930 年以前に生まれのブリガーデ長およびトラクター運転手計 23 人について「習得職業 erlernter Beruf」欄をみると、農業者、農民、酪農補助者、農業労働者などと称する者が 8 名いる。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.240, S.74.

(61) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, S.204.

(62) VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.280, Bl.31: バート・ドベラン市在住のトラクター運転手エンゲルハルトは、西ドイツから同市に一時滞在していた若い女のあとを追って西に逃亡、ただし収容所生活がいやになり 7 ヶ月後に帰郷したという。単身者の運転手の移動は、政治的動機付けによるものよりは、通常の労働移動に近い。Ebenda, Bl. 21.

(63) Ebenda, Bl.23, 26, 28, u. 32; VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.188, Bl.215.

(64) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.237, Bl.21-22.

(65) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.113.

(66) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.135.

(67) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl,118.

(68) ロストク県総農地面積は 1955 年末で 502,118ha（うち耕地 389,417ha）である。また穀物収穫面積の数字があり、これによれば総計は 200,251ha で、うち冬穀物が 118,666ha、夏穀物が 81,575ha、また秋蒔き菜種が 13,314ha となっている。Statistische Jahrbuch der DDR, 1956, Berlin 1957, S.374, 384-385. なお、県の数字を見るかぎり、農地の 2 割が放牧地・採草地に、残り 8 割が耕地にあてられ、その内訳はほ冬穀物 3 割、夏穀物 2 割、根菜類 3 割、菜種他 2 割となっていることから、土地利用としては輪栽式農法が営まれていたとみることができる。Ebenda, S.384-411.

(69) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.33.

(70) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.158.

(71) VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.215, Bl.90f. なお、本誌第 13 号掲載の前掲拙稿（1）19 頁においてニムツ経営について論じたさい、同頁記載の表 4 の「市場販売」分について、Marktproduktion を農民

自由市場への販売分と理解して誤った記述をした。Marktproduktion は、義務供出分と国家への売り渡し分＋ α の合計値と解釈すべきである。論旨には影響はないが、ここに謝して同頁下から 4 行目より 2 行目にいたる当該部分を削除する次第である。

（72） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.186, Bl.27.

（73） シュテフェンスハーゲン村に関しては次のバートドベラン郡文書館所蔵文書による。Kreisarchiv Bad Doberan, Nr.1-1746（LPG Steffenshagen）, Bad Doberan, d.14.03.1955; Kreisarchiv Bad Doberan, Rat der Gemeinde 29, Nr.2, Betriebskarten 1945; Rat der Gemeinde Steffenshagen 29, Nr.4, oh.Bl., Steffenshagen, d.10.03.1956; Rat der Gemeinde Steffenshagen 29, Nr.7, oh.Bl. Steffenshagen, d. 22.06.1953, u. Steffeshagen, d. 07.06.1954.

（74） Thomsen,JW., Vom Hakenpflug zum Mähdrescher. Eine Fotochronik technischer Entwicklung in der Landwirtschaft, Heide 1984, Foto Nr.44-47; Bentzien, U. Landmaschinentechnik in Mecklenburg（1800-1959）, Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte , 1965 Teil, 3. S.74ff: ニーマンは、1930 年代のメクレンブルク州について農民経営における機械化の進展をとくに高く評価している。1939 年で刈取り結束機の占有率は、大農が 5 割、グーツ経営が 3 割としている。Niemann, M., Traditionalität und Modernisierung in der Mecklenburgischen Gutswirtschaft in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts. Das Beispiel der Verwendung landwirtschaftlicher Maschine, in; Bispinck, H.u.a.（Hg.）, Nationalsozialismus in Mecklenburg und Vorpommern, Schwerin 2001, S.94. ちなみに本書によればメクレンブルク州の史上初のコンバイン稼働は 1939 年とのことである。Ebenda, S.96-97.

なお「刈取り結束機」の原語は Mähbinder, もしくは単に Binder である。俗にいうバインダーのことであるが、本稿では戦後日本の歩行型「バインダー」のイメージを喚起させないためもあり、原語に即して「刈取り結束機」とした。

（75） 前掲拙稿（3）157 － 163 頁参照。

（76） 拙著『近代ドイツの農村社会と農業労働者』（京都大学学術出版会）1997 年、232 頁。Niemann, a.a.O.,S.88, 93, u. 105.

（77） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.236, S.136.

（78） たとえば MTS イエネヴィッツでは「40 の集落をかかえるわが MTS で脱穀機が 21 台だけだ」と指摘されている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, S.29.

（79） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.186, S.26.

（80） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, S.42.

（81） Kreisarchiv Bad Doberan, Nr.1-1720, oh.Bl, Bad Doberan, den.14.07.1953.

（82） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.30.

（83） Krombholz, a.a.O., S.67.

（84） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.188, Bl.202. メクレンブルク・シュベリンの 1 モルゲンは約 0.65ha。1 ツェントナーは 50kg。v. Alberti, Mass und Gewicht, Berlin 1957, S.277 u. 361.

（85） 1957 年 8 月 20 日党指導部会議のクレンツの報告による。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.246, Bl.121.

（86） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.243, Bl.42.

（87） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.246, Bl.53

（88） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.188, Bl.195; 同じ主旨から、農業技師に対してコンバイン投入時期が判断できないと批判する声がでている。Ebenda, Bl.189.

（89） 1955 年 8 月 27 日開催の郡全権代理人の会合でこの点が集中的に指摘されている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.52-53.

（90） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.210. MTS ラーヴェンスベルクでは、各コンバインに工員一人が機械メンテナンスに責任を負う者として貼り付けられている。Rep.294, Nr.239, Bl.83.

（91） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.246, Bl.117, 119, u.121-122；Der Scheinwerfer, Juli, 1958, Jg.4, Nr.7, S.3; コンバイン複数台数投入方式は「帯状脱穀 Schwaddrusch」と呼称されている。

（92） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.51;Rep.294, Nr. 232, Bl.94; Rep.294, Nr.243, Bl.60.

（93） Statistische Jahrbuch der DDR, 1956, Berlin 1957, S. 374, u. 384-398.
（94） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.89.
（95） VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.232, Bl.116.
（96） Krombholz, a.a.O.,S.71.
（97） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245,Bl.89;　MTS ラーデガストでも、1954 年 9 月に「収穫部隊」の組織化についての言及がみられる。Rep.294, Nr.235, Bl.114; Rep.294, Nr.237, Bl.51.
（98） VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.88.
（99） Ebenda, Bl.93.
（100）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.214, Bl.81.
（101）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.189, Bl.43.
（102）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.190, Bl.231.
（103）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.116.
（104）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.71.
（105）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.189,Bl.21.
（106）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.50（+RS）.
（107）LPG ホーヘンフェルデでは 1958 年に MTS との調整の失敗によりジャガイモ収穫が困難に陥り、翌 1959 年は LPG の労働力が不足により「ジャガイモ・コンバイン」が機能しなかったという。さらに LPG ブッシュミューレンは 1956 年に MTS ジャガイモ収穫が失敗。LPG パーケンティンも 1957 年に甜菜収穫作業を MTS が拒否したため「カブの半分を雇用労働力に頼らざるを得なかった」という。Kreisarchiv Bad Doberan, Nr.1.1744（LPG Hohendfelde）, Nr.1-1722（LPG Parkentin）, Nr.1-1732（LPG Buschmühlen）の関連箇所から。
（108）たとえば 1954 年 MTS ラーデガスト党事業報告は、トラクター台数が少ないので、計画的なノルマ達成のためには二交代制を行わなければならないとしている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.237, S.21.
（109）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.223.
（110）1955 年 3 月 28 日付の MTS レーリク電話メモによる。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.243, Bl.11.
（111）Vgl. VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.76.
（112）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.121; Rep294, Nr.246, Bl.118.
（113）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.107.
（114）Ebenda: 1955 年 5 月、MTS イエーネヴィッツにおいても、村の LPG や「勤労農民」たちが交代運転手数名を組織することに頭を悩ませているとされている。Rep.294, Nr.232, Bl.163.
（115）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.33.
（116）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.159. MTS ラーヴェンスベルクでも、1955 年、農林労働組合管区書記が、農林大臣宛に 170 人の有資格「交代制運転手」のうち、投入可能なのは二人だけだという文書を書き送るよう指示した、という。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.188, Bl.189. ここにも交代運転手数が実は名目に過ぎないこととともに、基幹的運転手の交代運転手の能力に対する不信感が示されている。
（117）Wille, M., Die demokratische Bodenreform und die sozialistische Umgestaltung der Landwirtschaft in der Magdeburg Börde 1945 - 1961, in: Rach,H.u.a.（Hg）, Die werktätige Dorfbevölkerung in der Magdeburg Börde, Berlin（o）1986, S.243.
（118）クレム前掲書、195 頁。
（119）Galbler, a.a.O., S.95 - 97.
（120）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.244, Bl.18. ちなみに ディクスによれば 1 MTS あたりは 8 ブリガーデ、さらに 1 ブリガーデあたり 1200ha を基準として編成されたという。Dix, a.a.O., S.341.
（121）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.S.155-156.
（122）Ebenda, Bl.11.
（123）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242, Bl.185.

（124）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.79（RS）.
（125）Ebenda, Bl.161.
（126）Ebenda, Bl.79（RS）.
（127）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.73.
（128）Ebenda, Bl.111.
（129）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.85.
（130）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.75.
（131）Nr.234, Bl.185.
（132）Kreisarchiv Bad Doberan, Nr.1-1746（LPG Steffenshagen）, oh.Bl.（d. 24.01.1958）; Kreisarchiv Bad Doberan, Nr.1-1745（LPG Gersdorf）, oh.Bl.（d.20.01.1959）.
（133）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.178, 194, u. 244.
（134）Ebenda, Bl.193.
（135）MTS レーリクの第三ブリガーデ問題に関わる議論とメルヒゼデヒの言動に関する記述は以下による。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.245, Bl.245-246, 257-258, 271, u. 290-293; Rep.294, Nr.246, Bl.11-12, 92-93, u. 153.
（136）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.246, Bl.12.
（137）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.218-220.
（138）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.189, Bl.68.
（139）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.191, Bl.147.
（140）Ebenda, Bl.220.
（141）Ebenda, Bl.92.
（142）Bauerkämper, Ländliche Gesellschaft, S.320, Teske, a.a.O., S.15.
（143）Teske, a.a.O.,S.21.
（144）ゼンクピールについて。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.193, Bl.81; Rep.294, Nr.194, Bl.39; Rep.294, Nr.246, Bl. 41f., 56, 74, 84-85, 92-94, 109, u. 137.
（145）クレプスについて。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.14 u.123; Rep.294, Nr.242, Bl,166; Rep.294, Nr.245, Bl.257; Rep.294, Nr.246, Bl.23, 43-44, 85, 115, 119（+RS）, 120, 123, u. 142（RS）.
（146）ヴォルファイルについて。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213, Bl.12, 24, 28, 52, u. 66; Rep.294, Nr.239, Bl.7, 98, u. 157-158; Rep.294, Nr.240, Bl. 145-146.
（147）マレーネ・ポガンスキーについて。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.89, 98, 105, u. 106; Rep.294, Nr.240, Bl.78. 1955 年 9 月、LPG パンツォー党員が、仲間を売ったのはポガンスキーという意味の発言を女性指導員に対して行ったことが報告されている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239,Bl.89.
（148）Ebenda, Bl.98.
（149）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl.118f.
（150）Ebenda, Bl.160-163.
（151）Vgl. VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.213.
（152）たとえば、1957 年 11 月の MTS イエーネヴィツ管区指導員の党基礎組織担当一覧には初出の名前が幾人かみえる。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl.52.
（153）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.244, Bl.23.
（154）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.76（RS）.
（155）自動車の例は VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.64, バイクの例は VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.96, を参照。
（156）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.65（RS）.
（157）Ebenda, Bl.90（RS）.
（158）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.113.

（159）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.232, Bl.76.
（160）Ebenda, Bl.73.
（161）Ebenda, Bl.161（RS）.
（162）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.234, Bl.79.
（163）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.242, Bl.119-120.
（164）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.235, Bl.164.
（165）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.190, Bl.86.
（166）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.233, Bl.44.
（167）Ebenda, Bl.47-52.
（168）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.239, Bl.156-158.
（169）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.243, Bl.102. 署名はパプストである。
（170）Ebenda.
（171）この点はとくに MTS イエーネヴィツの党基礎組織の報告についてあてはまる。VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.233, Bl.36-43.
（172）Der Scheinwerfer, Februar 1958, Jg.4, Nr.1, S.1.
（173）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.236, Bl.5-16.
（174）MTS レーリク管区については詳しい計画書は未発見であるが、2 月 9 日の「農村の日曜日」についてはサンドハーゲン村の工作結果報告がある。これによればここでは 2 月 8 日（土）から 11 日（火）までの 4 日間にわたって「LPG 設立のための特別投入」がなされている。参加したのは MTS レーリクから 3 名、村助役、LPG 組合長、LPG ブリガーデ長と党書記、および郡財政課 4 名であったが、旧ビュドナー層（1-10ha）8 名は、全員が LPG 加盟を拒否したとされている。VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.214, Bl.89-91.
（175）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.191, Bl.65.
（176）Ebenda, Bl.203.
（177）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.243, Bl.118ff（Rerik, d.28.08.1958）; Rep.294, Nr.240, Bl.29ff.（Rerik, d.21.09.1958）.
（178）VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.192, Bl.29.
（179）Ebenda, Bl19ff.
（180）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.215,Bl. 48ff.
（181）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.194, Bl.37ff.
（182）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.193, oh. Bl.（Bad Doberan, d.15.10.1959）.
（183）Ebenda, oh. Bl（Bad Doberan, d.07.10.1959）.
（184）前掲拙稿（1）参照。
（185）Bauerkämper, Ländliche Gesellschaft, S.184f.u. 323; Galber, a.a.O.,S.95, u.127-129; クレム前掲書 222 ～ 223 頁）。
（186）Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, DK1, Nr.9074, Bl.12.
（187）VpLA Greifswald, Rep.200.4.6.1.2, Nr.219, S.1-6.
（188）Statistische Jahrbuch der DDR, 1956, Berlin 1957, S. 356.
（189）Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, DK1, Nr.9074, Bl.13.
（190）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.191, Bl.62.
（191）Ebenda, Bl.277. これはラインスハーゲンの事例である。
（192）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.222, Bl.10.
（193）VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.194, Bl.71.
（194）VpLA Greifswald, Rep.294,Nr.246, Bl.187ff.
（195）Ebenda, Bl.196.
（196）VpLA Greifswald, Rep.200.4.6.1.2, Nr.219, S.2.

（197）Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, DK1, Nr.9074, Bl.14.

（198）上記の県農業課 LPG 掛文書においては、グレヴェスミューレン郡 MTS ホーフ・ヴァルソーの例があげられ、トラクター運転手 23 人が解約を通知、このうち 10 人は LPG 組合員となるようにとの説得に応じたものの、「残りの 13 人は他県の大規模建設所に採用された。その言い分は『われわれはもう一度自分が自由な労働者かどうか、そして自分が欲するように働けるかどうかを知りたい』というものだった」と記されている。VpLA Greifswald, Rep.200.4.6.1.2, Nr.219, S.2.

（199）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.195, Bl.61f.

（200）Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, DK1, Nr.9074, Bl..12-24, bes. Bl.14, 15, u.17.

（201）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.193, Bl.87.

（202）VpLA Greifswald, Rep.294, Nr.195, Bl.63（RS）.

（203）Vgl. Dix, a.a.O.,S.341-349ff, u. Abb.32.

（受理日　2009 年 1 月 13 日）